

指定有害動植物の見直しに係るリスク評価

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)				評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント						
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性			課題等	ウ関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	工国の施策 上の重要 性	評価3	
1	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	イネミズゾウムシ	○	46	○	発587,548ha 防703,142ha	37.0% 44.2%	A	△	高温で増殖	△	短距離飛翔	B	○	5	2	10	×	-	△	関係機関64位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	全国に分布。国内では雌だけの単為生殖。苗を移植後、成虫が水田に侵入し葉を食害する。食害が多いと生育が遅れ、分けつが滞り、減収や株絶えとなる。水稻生育初期の重要な害虫であり、国の発生予察の対象とする必要がある。	
2	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	コブノメイガ	○	43	○	発255,163ha 防394,712ha	18.1% 30.1%	A	△	高温で増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	2	10	△	薬剤抵抗性フェーズII(エトフェンプロックス、カルタップ)	○	農業者35位 関係機関15位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	梅雨時期に中国大陸から飛来する。九州以北では越冬できない。葉を筒状に縦り葉内面を食害する。成長すると分散して表面を食害し、葉を白くする。出穂期頃までに被害率が高くなると、大きく減収する可能性があるため、国の発生予察の対象とする必要がある。	
3	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	セジロウンカ	○	47	○	発674,780ha 防911,302ha	42.4% 57.3%	A	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	薬剤抵抗性フェーズIII(フィプロニル)	○	(ウヅカ類) 農業者3位 関係機関3位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	海外から飛来し、茎葉の吸汁や産卵時に葉鞘を割くことで加害する。多発した場合は、黄変枯死する。成・幼虫の排泄物で茎葉にすす病も発生する。多くの薬剤で感受性の低下が確認されており、国の発生予察の対象とする必要がある。	
4	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	ツマグロヨコバイ	○	45	○	発528,026ha 防420,452ha	33.2% 26.5%	A	△	高温で増殖	△	短距離飛翔	B	○	5	2	10	△	ウイルス媒介(萎縮病等)	×	-	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	吸汁による茎葉の被害と病原ウイルスや病原ファイトプラズマを媒介することによる萎縮病、わい化病、黄萎病の被害が発生する。8月～9月の高温で多発し、減収する可能性があるため、国の発生予察の対象とする必要がある。	
5	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	トビイロウンカ	○	43	○	発159,621ha 防499,252ha	10.0% 31.4%	A	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズII(イミダクロプリド、プロフェンチン等) ・抵抗性がある薬剤多数(24種)	○	(ウヅカ類) 農業者3位 関係機関3位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	海外から飛来し、成・幼虫が株元付近で吸汁加害する。被害は出穂後に目立ち、被害株は黄白色に枯死して、丸く倒伏する。多くの薬剤で感受性の低下が確認されており、発生予察により初発生を確認し、その後の防除を適期かつ適切に行う必要がある。	
6	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	ニカメイガ	○	44	△	発129,985ha 防429,881ha	8.2% 27.0%	A	△	高温で増殖	△	短距離飛翔	B	○	5	2	10	×	-	△	関係機関71位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	年2回被害が発生する。第1世代幼虫では、幼虫が茎の中に入食することによる心枯れが発生し、第2世代幼虫では、出ずくみや白穂が発生し、激しい場合は倒伏することもある。1972年頃から発生が減少していたが、近年再び増加傾向にあり、国の発生予察の対象とする必要がある。	
7	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	斑点米カメシ類	○	47	○	発588,446ha 防1,629,252ha	37.0% 102.5%	A	○	高温で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	×	-	○	農業者1位 関係者2位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	アカスジカメシカメ、アカヒゲホソドリカメシカメ、クモヘリカメシなど多くの種が存在し、発生面積が広く、大きな品質低下を及ぼす。関係機関及び農業者からの注目度が特に高く、国の発生予察の対象とする必要がある。	
8	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	ヒメトビウンカ	○	47	○	発752,430ha 防708,884ha	47.3% 44.6%	A	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズII(イミダクロプリド、プロフェンチン等) ・ウイルス媒介(イネ縞葉枯病)	○	(ウヅカ類) 農業者3位 関係機関3位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	国内で越冬及び海外から飛来し加害する。イネ縞葉枯病を媒介し収量低下等の大きな被害を及ぼす。多くの薬剤で感受性の低下が確認されており、国の発生予察の対象とする必要がある。	
9	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	1	フタオビコヤガ	○	43	○	発312,597ha 防179,614ha	19.7% 11.3%	A	△	高温で増殖	△	短距離飛翔	B	○	5	2	10	×	-	△	関係機関46位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	一時的に発生が減少していたが、近年全国的に多発傾向。移植直後から若齢期の食害を受けた場合は白いカスリ状となり、著しく生育が遅れるため、国の発生予察の対象とする必要がある。	
10	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	2	稲こじ病	○	35	△	発105,379ha 防45,155ha	6.6% 2.8%	A	△	穂ばらみ期の低温・多雨で多発	×	土壌伝染性。地表に落葉し、結集した厚膜胞子が翌年発生して穂などに侵入。その後、幼穂に感染して発病する。	×	B	○	5	2	10	×	-	×	-	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	穂ばらみ期から出穂期にかけて、冷涼で多雨の年に多発する。前年多発したほ場では発生が多い傾向がある。乳熟期頃から穂が膨らみ、内部で発生した菌糸塊が外部に現れる。初め黄緑色、後に団子状の緑～黒色の厚膜胞子を形成すると、稔実が悪くなり不稔粒が増える。また、病粒には、ウスチロキシンというかび毒が含まれる。近年多発傾向であり、品質の低下及び減収を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適期防除を行う必要がある。
11	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	2	いもち病	○	47	○	発596,050ha 防3,056,888ha	37.5% 192.3%	A	○	夏季の低温、多雨、日照不足で急速に感染拡大	○	・分生胞子の風雨による飛散 ・種子伝染	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズII(オキサリプロリン) ・薬剤抵抗性発達リスク高	○	農業者2位 関係機関1位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	葉いもちの急性型病原は、多くの胞子を形成しつづ、急速に病原を拡大する。病原菌の出ず毒素によって、稲株が萎縮し、枯死(ズリロミ)することもあるため、国の発生予察の対象として適期防除を行う必要がある。	
12	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	2	縞葉枯病	○	42	×	発75,405ha 防92,971ha	4.7% 5.8%	B	○	罹病したヒメトビウンカの発生量による	△	ヒメトビウンカにより伝染(経卵伝染)	A	○	5	3	15	○	ウイルス病の登録農薬はないため、ヒメトビウンカの防除が重要	△	関係機関24位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	本田初期に感染すると、新葉が退色し、徒長して垂れ下がりが枯死する。遅い感染では、葉脈に沿って縞状の斑紋を生じ、激しいと全体が黄化する。穂は、出ずくみ、奇形、不稔となる。本病に対しては、発生予察に基づくヒメトビウンカの防除を適切に実施する必要がある。	
13	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	2	ばか苗病	○	43	○	発29,239ha 防838,631ha	1.8% 52.8%	A	△	高温・多湿で増殖	×	種子伝染性	B	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズII(バネニル等) ・薬剤抵抗性発達リスク中	△	関係機関56位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	種場の重要病害。箱育苗の普及により、本病の発病に好適な条件が揃ったことや、薬剤耐性菌の出現、温湯浸漬の不適切な処理等によって、種子消毒の効果が十分得られず、全国的に多発傾向。国の発生予察の対象として、発生状況を把握し、適切に防除指導を行う必要がある。	
14	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	2	もみ枯細菌病	○	43	△	発70,789ha 防389,696ha	4.5% 24.5%	A	△	出穂期の高温・多湿で増殖	×	種子伝染性	B	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズII(カルボキシベンゾイミダゾール) ・抗生物質	×	-	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	苗と本田の穂に発生する。苗では、葉鞘部が淡褐色に変化して、次第に遺褐色となり、やがて腐敗枯死する。育苗箱では、パチ状の発生が多い。穂では、出穂期以降、穂全体が灰白色になり、その後淡黄色となる。病徴は穂だけに限られる。罹病した玄米には、帯状の褐色条斑が生じる。重症穂は、不稔穂が多く、傾倒せずに直立する。ほ場では、重症株を中心に押状に発生する。温湯浸漬の不適切な処理等によって、種子消毒の効果が十分得られず、全国的に多発傾向にあり、国の発生予察の対象として、発生状況を把握し、適切に防除指導を行う必要がある。	
15	普通作物	水稻	1,589,600	17,864	2	紋枯病	○	47	○	発557,148ha 防706,522ha	35.0% 44.4%	A	△	30℃程度の高温と多雨でじわじわ増殖	×	田で越冬した菌核が代かきによって、イネの株元に付着	B	○	5	2	10	×	-	○	農業者12位 関係機関9位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	高温、多湿、多窒素、早期・早植栽培が本病の発生を助長する。多発した場合は、下葉から枯れ上がり倒伏しやすくなる。温暖化の進行にもよって発生が増大が懸念される病害として、注目されており、国の発生予察の対象とする必要がある。	
16	普通作物	麦類	269,820	377	1	アブラムシ類	△	24	○	発33,256ha 防2,230ha	12.3% 0.8%	A	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	4	2	8	×	-	×	-	食料・農業・ 農村基本計 画	B	×	ムギクビレアブラムシ及びムギヒゲナガアブラムシが主要種。業上で繁殖して穂にも寄生するが、大きな被害は報告されていない。	
17	普通作物	麦類	269,820	377	2	赤かび病	○	40	○	発54,914ha 防453,157ha	20.4% 167.9%	A	○	開花後10日間、降雨と気温20～27℃で急速に増殖	○	胞子の飛散	A	○	4	3	12	○	薬剤抵抗性フェーズIII(リフルミゾール等)	○	農業者9位 関係機関4位	食料・農業・ 農村基本計 画	A	○	麦の開花期に赤かび病菌が穂に感染する。出穂前後から乳熟期にかけて気温が高く、降水日数が多いと多発する。また、赤かび病の病原菌が作るマイコトキシン「デオキシニバレノール」による汚染が問題となっており、食品安全の面からも適期防除が必要である。	

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)										総合 評価	評価コメント	
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等	関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	I国の施策 上の重要 性			評価3
18	普通作物	麦類	269,820	377	2	うどんこ病	○	39	○	発19,007ha 防228,891ha	7.0% 84.8%	A	○	春が温暖で雨が多く、夏が早くから繁茂すると急速に増殖	○	分生胞子の風による飛散	A	△	4	2	8	○	病原菌の耐性リスク高 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等 ・抵抗性がある薬剤多数(74種:モモアカアブラムシ)	×	-	食料・農業・農村基本計画	A	○	白色粉状の病斑が下葉に発生し、しだいに上位葉に移る。激しい場合は、罹病葉が枯れ上がり、稔実が悪化して、整粒歩合が低下する。検査等種の落等及び減収の原因となるため、国の発生予察の対象として適切に防除を実施する必要がある。
19	普通作物	大豆	133,180	305	1	アブラムシ類	○	34	○	発23,073ha 防40,135ha	17.3% 30.1%	A	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	○	・ダイズわい化病ウイルス(MVDV)等を媒介 ・抵抗性がある薬剤多数(74種:モモアカアブラムシ)	×	-	食料・農業・農村基本計画	A	○	ダイズアブラムシとマメアブラムシは、開花期から新葉や若葉に多数寄生してダイズの生育を阻害する。ジャガイモヒゲナガアブラムシは、着実期以降に葉裏に多数寄生する。多発すると早期落葉して減収することに加え、ダイズわい化病など多くのウイルスを媒介し、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象とする必要がある。なお、主要種ではないが、モモアカアブラムシ及びワタアブラムシは薬剤抵抗性が発達している。
20	普通作物	大豆	133,180	305	1	吸実性カメムシ類	○	40	○	発33,055ha 防64,030ha	24.8% 48.0%	A	○	高温で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等	○	農業者20位 関係機関11位	食料・農業・農村基本計画	A	○	ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、オオクサカメムシ等。口針を葉に刺して吸汁する。被害は、葉の落下や偏平(板葉)による収量の減少、子実の歪形・変色による品質の低下である。被害が激しい場合は、葉が青いまま残り、いわゆる青立ちとなる。大豆の主要害虫であり、国の発生予察の対象とする必要がある。
21	普通作物	大豆	133,180	305	1	ハスモンヨトウ	○	37	○	発34,979ha 防64,560ha	26.3% 48.5%	A	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	4	3	12	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等 ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	○	農業者12位 関係機関10位	食料・農業・農村基本計画	A	○	極めて広食性。大豆での被害は、ふ化幼虫が集団で葉全体を食べて白くなるまで食害する。多発した場合は株全体が食害されて丸坊主になるだけでなく葉も食害される。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
22	普通作物	小豆	31,260	221	1	アブラムシ類	×	2	×	発95ha 防-	0.3% -	C	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	2	3	6	○	・アズキモザイク病ウイルス(BGMV)等を媒介	×	-	-	A	×	マメアブラムシが主要種。新葉及び莢に群がって吸汁加害するため、著しく生育が抑制される。アズキモザイク病を媒介し、大きな被害を及ぼす。小豆での発生は多くない。
23	普通作物	小豆	31,260	221	1	オオタバコガ	×	1	×	発380ha 防-	1.2% -	C	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	△	2	3	6	○	・抵抗性がある薬剤多数(48種)	×	-	-	A	×	極めて広食性。小豆の開花期から莢肥大期に幼虫が莢等を食害する。幼虫が浅い土中に潜り、蛹態で越冬する。西日本では、露地でも越冬可能。高温乾燥の年に発生が多い。ハウス内及び露地で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するが、小豆での発生は多くない。
24	普通作物	小豆	31,260	221	1	マメノメイガ	×	1	×	発321ha 防-	1.0% -	C	△	高温で増殖	△	短距離飛翔	B	△	2	2	4	×	-	×	-	B	×	小豆の開花後、蕾、花、若葉に産み付けられた卵からふ化した幼虫が食入して加害する。小豆での発生は多くない。	
25	野菜	アスパラガス	6,218	270	1	アザミウマ類	×	5	×	発135ha 防-	2.2% -	C	○	高温で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	2	6	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等	△	関係機関27位	-	A	×	萌芽直後の茎が成虫に食害されて白斑を生じ、多発すると茎の屈曲や奇形が現れる。通常は成虫、暖地では一部幼虫で越冬し、寒冷地では6月、暖地では3月から初冬まで活動する。寒冷地では3世代前後、暖地では6世代前後、温室では10世代以上を繰り返すため、アスパラガスでの発生は多くない。
26	野菜	アスパラガス	6,218	270	1	ハスモンヨトウ	×	3	×	発33ha 防438ha	0.5% 7.0%	C	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	△	3	3	9	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等 ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	-	A	×	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するが、アスパラガスでの発生は多くない。
27	野菜	いちご	5,970	1,601	1	アザミウマ類	△	22	○	発384.5ha 防4,816ha	6.4% 80.7%	A	○	高温で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等 ・抵抗性がある薬剤多数(23種:ミカンキイロアザミウマ)	△	関係機関18位	-	A	○	ヒラズハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、チャノキイロアザミウマ等が発生する。花や果実に寄生し、加害部は褐変する。春から夏にかけて多発する。年間数世代以上を繰り返して加害を続けるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
28	野菜	いちご	5,970	1,601	1	アブラムシ類	○	35	○	発1,736ha 防12,007ha	29.1% 201.1%	A	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・ウイルス病(SMoV、SVBV等)を媒介 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等 ・抵抗性がある薬剤多数(42種:ワタアブラムシ)	△	関係機関22位	-	A	○	イチゴアブラムシ、ワタアブラムシ、イチゴケナガアブラムシ、イチゴクキアブラムシ等が発生する。新葉や葉柄、根に群生して吸汁加害するとともに、ウイルス病を媒介する。施設では、周年発生して加害するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
29	野菜	いちご	5,970	1,601	1	ハスモンヨトウ	○	34	○	発1,358ha 防8,679ha	22.8% 145.4%	A	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベリウム、アクリノリド、フクロフェナゼル)等 ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	-	A	○	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。いちごでは、芯葉のほか花蕾、果実も好んで食害し、被害が大きい。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
30	野菜	いちご	5,970	1,601	1	ハダニ類	○	36	○	発2966.2ha 防20,102ha	49.7% 336.7%	A	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	糸を吐き、風によって拡散 ・管理作業者に付着して拡散	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(アクリノリド、シフルトフェナゼル、クロロフェナゼル)等 ・抵抗性がある薬剤多数(92種:ナミハダニ)	○	農業者20位 関係機関6位	-	A	○	ナミハダニ、カンザワハダニ等が発生する。幼・成虫が葉裏に寄生する。葉の白斑症状や生育阻害、株全体の萎縮等の被害が生じるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
31	野菜	いちご	5,970	1,601	2	うどんこ病	○	35	○	発1652.4ha 防22,460ha	27.7% 376.2%	A	○	20℃前後で多発	○	分生胞子の風による飛散	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(DMI)	△	関係機関12位	-	A	○	葉、果実、果柄に発生し、多発時には葉柄にも発生する。初めは下葉に赤褐色の斑点として現れ、やがて新葉の裏面に白色菌叢を生じ、進行すると小葉は上向きに巻縮してスプーン状となる。蕾に発生すると花弁は茶紅色に変わり、幼果の肥大が抑えられ、種子が飛び出し、硬化する。着色期の果実に発生すると色づきが遅れ、商品価値を失うため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
32	野菜	いちご	5,970	1,601	2	炭疽病	△	26	△	発506ha 防-	8.5% -	B	○	高温・多湿で多発	△	分生胞子の雨滴による伝播	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI, MBC)	○	農業者35位 関係機関16位	-	A	○	葉、ランナーなど地上部の各部位と、冠部を侵す。3~7mmの黒色紡錘形の速く陥没した病斑を生じ、拡大するとランナーや葉柄を囲み、その先端部が枯れる。潜在感染株は托葉や冠部の一部に保菌して越冬し、翌春に発病しはじめる。高温・多湿条件下で病斑上に多量の分生子を形成し、雨水によって飛散して二次伝染するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント				
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等			関係機 関・農業 者の注 目度	アンケ ー ト 結 果	I国の 施策 上の 重要 性	評価3
33	野菜	いちご	5,970	1,601	2	灰色かび病	○	35	○	発1389.6ha 防15,356ha	23.3% 257%	A	○	多湿で多発	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	○	・病原菌の耐性リス ク高 ・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(GoI, MBO, N フェニルカーバマ ド等)	△	関係機関58位	-	A	○	おもに果実に発病するが、花卉、葉柄など地上部のあらゆる組織を侵す。果実では収穫期近くのものごとくに発病しやすく、淡褐色の小斑点を生じ、しだいに拡大して果実を軟化腐敗させ、全面に灰色微粉状のかびを密生する。果柄、葉柄には暗褐色の病斑を生じ、病勢がすすむと、灰色のかびを密生し、株枯れ症状となる。病斑上に形成される分生子が空気中に飛散して伝染、まん延する。露地では収穫期の多雨、施設栽培では多湿となると、まん延するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
34	野菜	えだまめ	12,880	365	1	吸実性カメムシ類	×	1	×	発233ha 防-	1.8% -	C	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	3	9	○	・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(エトフェンブ ロックス等)	×	-	-	A	×	マルカメムシ、ブチヒゲカメムシ、トゲシラホシカメムシ、クサギカメムシ等が発生する。茎や葉柄、子実を吸汁する。4月頃に出現し、11月頃に越冬場所へ移動する。えだまめでの発生は多くない。
35	野菜	えだまめ	12,880	365	1	フタスジヒメハムシ	×	1	×	発337ha 防-	2.6% -	C	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	3	9	△	・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(エトフェンブ ロックス等)	×	-	-	B	×	成虫が葉、子葉、莢、茎を食害する。莢の表面が食害されると、病菌が侵入して黒斑となり、品質を悪化させる原因になる。露地では年2世代、寒冷地では1世代発生する。成虫が果實や雌雄の落葉や草間で越冬し、関東地方では5月下旬から8月下旬頃まで摂食産卵活動を続けるが、えだまめでの発生は多くない。
36	野菜	えだまめ	12,880	365	2	べと病	×	1	×	発187ha 防-	1.5% -	C	○	多湿で急速に 増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	△	3	2	6	△	・病原菌の耐性リス ク中	×	-	-	B	×	葉の表面に黄白色の小斑点が現れ、しだいに暗灰白色ないし灰褐色となる。葉の裏面には汚白色のかびを生ずる。種子では表面に汚白色の菌糸がマット状に付着する。種子又は被害植物上において、胞子で越冬する。越冬後、分生胞子を形成し、これが空気中で飛散し、葉の気孔などから侵入・感染する。湿度が高いとき発病が助長されるが、えだまめでの発生は多くない。
37	野菜	オクラ	774	83	1	ハスモンヨトウ	×	1	×	発23ha 防-	3% -	C	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	×	1	2	2	○	・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(シベルメト リン、PAP、メソメ ル、BT、エトフェンブ ロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	-	B	×	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐薬性が低く、冬季休眠性が不明のため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するが、オクラでの発生は多くない。
38	野菜	かんしょ	39,300	846	1	アブラムシ類	×	2	×	発790ha 防-	2.0% -	C	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・サツマイモ斑紋モ ザイクウイルス (SPFMV)等を媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(イミダクロー ピド、アセタジプロ ド等) ・抵抗性がある薬剤 多数(42種:ワタア ブラムシ)	△	関係機関22位	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	×	ワタアブラムシ、モモアアカアブラムシ等が発生することがあるが、通常は少ない。新葉の葉裏や葉柄に小さなコロニーを形成し、ウイルス病を媒介する。かんしょでの発生は多くない。
39	野菜	かんしょ	39,300	846	1	ハスモンヨトウ	×	13	○	発3,491ha 防11,920.6ha	54.5% 30.3%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(シベルメト リン、PAP、メソメ ル、BT、エトフェンブ ロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	○	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐薬性が低く、冬季休眠性が不明のため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
40	野菜	かんしょ	39,300	846	1	ハダニ類	×	1	×	発947ha 防-	2.4% -	C	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 のよって拡散 ・管理作業 者に着して拡 散	A	○	5	2	10	×	-	△	関係機関71位	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	×	チャノホコリダニ、アシノワハダニ等が発生する。生長点付近に寄生して新葉を加害する。そのため生長点部の新葉が萎縮したり、奇形化し、一見ホルモン障害を呈する。かんしょでの発生は多くない。
41	野菜	さといも	13,580	376	1	アブラムシ類	×	12	○	発2,919ha 防3,648ha	21.5% 26.9%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	×	4	1	4	○	・サツマイモザイク病 (OMV, DaMV)を媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(イミダクロー ピド、アセタジプロ ド等) ・抵抗性がある薬剤 多数(42種:ワタア ブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	B	×	ワタアブラムシが発生する。葉裏に群生して吸汁加害する。新葉に寄生したときには葉を多少巻く。ウイルス病を媒介するが、さといもで大きな被害が発生することは多くない。
42	野菜	さといも	13,580	376	1	ハスモンヨトウ	×	11	○	発1641.2ha 防3369.2ha	12.1% 24.8%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	4	2	8	○	・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(シベルメト リン、PAP、メソメ ル、BT、エトフェンブ ロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐薬性が低く、冬季休眠性が不明のため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
43	野菜	さといも	13,580	376	1	ハダニ類	×	8	○	発1,912ha 防2,779ha	14.1% 20.5%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 のよって拡散 ・管理作業 者に着して拡 散	A	×	4	1	4	×	-	△	関係機関71位	野菜生産出 荷安定法	B	×	カンザワハダニが発生する。葉裏に寄生し、群生して吸汁加害する。被害葉は黄化、褐変する。越冬は休眠雌成虫で行うが、比較的強い休眠で、温室等ですぐに覚醒する。さといもで大きな被害が発生することは多くない。
44	野菜	さやえんどう	3,906	194	1	シロイチモジヨトウ	×	1	×	発183.67ha 防367ha	4.7% 9.4%	C	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	2	3	6	○	抵抗性がある薬剤 多数(32種)	×	-	-	A	×	葉、果皮、花蕾、花卉を食害する。一般的に狭い隙間に潜り込んだり、狭い場所がない場合は自ら葉をつり合わせてその内部から食害する。施設栽培では周年発生するが、特に夏期高温時に多発する。一般的に、施設栽培地帯では5~10月に、露地栽培地帯では8~9月に発生が多い。成虫は、昼間は作物の葉裏や草茎に潜っており、夜間に活動する。さやえんどうでの発生は多くない。
45	野菜	さやえんどう	3,906	194	1	ハスモンヨトウ	×	1	×	発78ha 防-	2% -	C	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	2	3	6	○	・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(シベルメト リン、PAP、メソメ ル、BT、エトフェンブ ロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	-	A	×	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。さやえんどうでは、莢も食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐薬性が低く、冬季休眠性が不明のため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するが、さやえんどうでの発生は多くない。
46	野菜	スイートコーン	25,040	340	1	アワノメイガ	×	1	×	発46ha 防-	0.2% -	C	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	3	9	×	-	×	-	-	B	×	幼虫が巻葉や葉鞘、雌穂のほう葉のすき間などに入って食害し、成長するにしたがって雌穂柄内に穿孔侵入して食害する。産卵は草丈が30cmを超えるところから始まり開花期に最も多く、産卵期には終わる。成虫は北海道や東北地方北部では年1回、東北地方南部では年2回、関東~西南地域では3~4回発生し、老熟幼虫で冬を越す。成虫は日没後から夜半にかけて活動し、雌成虫は90粒前後の卵塊を葉裏等に産みつける。スイートコーンでの発生は多くない。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)				評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント						
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性			課題等	関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	I国の施策 上の重要 性	評価3	
47	野菜	スイートコーン	25,040	340	1	オオタバコガ	×	2	×	発394ha 防1,546ha	1.6% 6.2%	C	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	△	3	3	9	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメトリン等) ・抵抗性がある薬剤多数(48種)	△	関係機関32位	-	A	×	極めて広食性で各種野菜類、花卉類の葉を食害するほか、新芽、花蕾、果実、茎の中などに潜り込んで食害する。年2~3回発生し、被害は8月ごろから目立つようになる。老齢幼虫は土中深く潜って蛹化し、蛹態で越冬する。一晚に頭の雌が200~300卵産む。スイートコーンでの発生は多くない。	
48	野菜	そらまめ	2,224	53	1	ハスモンヨトウ	×	1	△	発116ha 防-	5.2% -	B	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	×	1	3	3	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメトリン、PAP、メタミル、BT、エトフエンプロックス等) ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	-	B	×	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が低いため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を食害する。そらまめでの発生は多くない。	
49	野菜	やまのいも (ながいも)	7,576	427	1	アブラムシ類	×	1	△	発508ha 防-	6.7% -	B	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	×	3	1	3	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(ジノキサラン、クロチアニジン等) ・抵抗性がある薬剤多数(42種、ワタアブラムシ、74種、モモアカアブラムシ)	△	関係機関22位	-	B	×	ニワトコフレアブラムシが発生する。ヤマノイモでみられることは少ないが、新梢や新葉に寄生して吸汁する。	
50	野菜	やまのいも (ながいも)	7,576	427	2	炭疽病	×	2	×	発90ha 防-	1.2% -	C	○	高温・多湿で多発	△	分生胞子の雨滴による伝播	A	△	3	3	9	×	-	×	-	-	B	×	葉、葉柄、茎に発生する。葉には初め褐色の小斑点を生ずる。湿度の高い条件では急速に拡大して、黒褐色の大きな病斑となり、融合することが多い。病斑がやや古くなると中央部は灰褐色になり、小さな黒色粒点を散らす。この部分は破れやすい。激しく発病すると枯れ上がる。主として菌糸の形で被害植物について越冬し、翌年の伝染源になると考えられる。やまのいもでの発生は少ない。	
51	野菜	やまのいも (ながいも)	7,576	427	2	葉洗病	×	1	△	発706ha 防-	9.3% -	B	○	降雨の多い時期に多発	○	分生胞子の風による飛散	A	△	3	2	6	×	-	×	-	-	B	×	葉、葉柄、茎に発生する。葉には退緑色病斑を生じ、しだいに拡大し葉脈に囲まれた多角形病斑となる。のちに病斑上には黒褐色の小粒点を散らし、やがて白色の粉を生ずる。病斑は褐変し、白粉が目立つようになり、破れたり、葉は枯死して脱落したりする。茎、葉柄も白粉を噴出して枯死する。分生子層や菌糸の形で被害植物について越冬し、翌年これより分生子を生じて伝染する。梅雨期および秋季の降雨の多い時期に発生が多い。やまのいもでの発生は多くない。	
52	野菜 (アカザ科)	ほうれんそう	21,860	1,001	1	アブラムシ類	×	14	△	発1197.8ha 防5440.8ha	5.5% 24.9%	B	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・ホウレンソウモザイクウイルス (CMV、TuMV等)を媒介 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(イミダクロプリド、アセタミプリド等) ・抵抗性がある薬剤多数(74種、モモアカアブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出荷安定法	-	A	○	ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ等が発生する。葉裏や茎に群生して吸汁加害し、葉の萎れや葉巻症状を引き起こすとともに、ウイルス病を媒介するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
53	野菜 (アカザ科)	ほうれんそう	21,860	1,001	1	ハスモンヨトウ	×	7	×	発90.4ha 防189ha	0.4% 0.9%	C	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメトリン、PAP、メタミル、BT、エトフエンプロックス等) ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出荷安定法	-	A	×	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が低いため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を食害するが、ほうれんそうでの発生は多くない。
54	野菜 (アカザ科)	ほうれんそう	21,860	1,001	2	べと病	×	11	×	発147.4ha 防3787.2ha	0.7% 17.3%	C	○	低温(8~10℃)・多湿で多発	○	卵胞子による土壌伝染・分生胞子の風による飛散	A	○	5	3	15	△	病原菌の耐性リスク中	×	-	野菜生産出荷安定法	-	A	×	葉に発生する。初め葉の表面に蒼白色ないし黄色の小斑点を生じ、後に葉の大部分が淡黄色となって、ついには枯死して乾燥する。病斑の裏側にはわずかに褐色の粉を生ずる。菌糸の形で被害株について越冬し、気温の上昇とともに分生子を形成し、空気伝染する。種子伝染の可能性もある。病葉内部に形成された卵胞子が土中に残り、これが第一次感染源となっているものと考えられる。ほうれんそうでの発生は多くない。
55	野菜 (アブラナ科)	かぶ	4,944	142	2	べと病	×	1	×	発111ha 防-	2.2% -	C	○	気温の低い時期に発病、まん延	○	分生胞子の風による飛散	A	△	2	3	6	△	病原菌の耐性リスク中	×	-	-	B	×	葉のみに発生する。病斑は黄色。葉脈に限られた不整多角形で、葉面に薄く灰白色粉状のかびを生ずる。被害葉は下葉からしだいに枯れる。卵胞子および菌糸の形で被害株の葉で越冬し、第一次伝染源となる。春と秋に降雨にあうと分生子を生じて空気伝染するが、かぶでの発生は多くない。	
56	野菜 (アブラナ科)	キャベツ	33,720	1,150	1	アブラムシ類	○	34	○	発4,116ha 防-	12.2% -	A	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	△	・カリフラワーモザイクウイルス(CaMV)等を媒介するが、被害は軽微 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(イミダクロプリド、アセタミプリド等)	△	関係機関22位	野菜生産出荷安定法	-	A	○	キャベツには、主にダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシが寄生する。葉裏に群がって吸汁加害し、葉を黄変させる。多発した場合は、生育が著しく阻害されるため、結球が遅れて球が小さくなる。また、ウイルスを媒介し、モザイク病を発生させるが、被害程度は軽微。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
57	野菜 (アブラナ科)	キャベツ	33,720	1,150	1	コナガ	○	37	○	発5,779ha 防42,511ha	17.1% 126.1%	A	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(フルベンジアミド) ・抵抗性がある薬剤多数(91種)	△	関係機関52位	野菜生産出荷安定法	-	A	○	各種のアブラナ科野菜を食害する。幼虫は、葉の表皮を残して葉緑層を食害し、生育を遅らせる。また、定植後間もない苗の芯葉部が食害されると、芯止まりとなって結球できなくなる。アブラナ科野菜や雑草で1年中活動し、関東以西の暖地では、年間10~13回発生する。北日本では、暖地からの長距離移動個体がその年の発生源になると考えられている。晩春から初夏に多発し、キャベツなどアブラナ科野菜に大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
58	野菜 (アブラナ科)	キャベツ	33,720	1,150	1	ハスモンヨトウ	△	25	△	発1,686ha 防7,191ha	5.0% 21.3%	B	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメトリン、PAP、メタミル、BT、エトフエンプロックス等) ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出荷安定法	-	A	○	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が低いため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を食害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
59	野菜 (アブラナ科)	キャベツ	33,720	1,150	1	ヨトウガ	○	33	○	発2,207ha 防25,834ha	6.5% 76.6%	A	○	高温で急速に増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	×	-	×	-	野菜生産出荷安定法	-	A	○	葉裏に卵塊として産みつけられた卵からふ化した幼虫は、最初葉の裏に群生し、葉の表皮を残して食害するが、やがて葉に孔を開けるようになる。中齢以降は分散して昼間は地中に隠れ、夜間に活動するようになり中齢だけを産んで残して暴食するなど大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害 虫区 分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)				評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント					
							7 分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7 気象条件 による増殖	生態	イ 拡散性	生態	評価2	7 加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ 防除の 困難性			課題等	ウ関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	I 国の施策 上の重要 性	評価3
60	野菜 (アブラナ 科)	キャベツ	33,720	1,150	2	菌核病	○	33	○	発1,954ha 防19,537ha	5.8% 57.9%	A	○	気温15~20℃、 雨天が続き、多 湿条件になると、 急速に増殖	○	子のう胞子の 飛散	A	○	5	3	15	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて多発性の病菌で多くの作物を侵す。結球期に発生し、下葉の葉柄基部近くでできた水浸状の病斑が、茎を伝わり結球部に進行して腐敗させる。結球の内側には、白色綿毛状の菌糸と、黒色でネズミの糞状が見られる菌核が土中に残存し、菌核から形成された子のう胞子が飛散して伝染する。発病適温(15℃~20℃)となる時期は特に注意が必要であるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
61	野菜 (アブラナ 科)	キャベツ	33,720	1,150	2	黒腐病	○	32	○	発3,155ha 防30,178ha	9.4% 89.5%	A	△	高温で増殖	△	雨滴による 伝染 ・種子伝染	B	○	5	2	10	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	A	○	下葉から発病し、葉縁に葉脈を中心として外側に広がるV字形の黄色の病斑を生じる。激しい場合は、茎の維管束も黒変する。病原細菌は、被害葉とともに土中に残存して、雨滴により葉に付着して拡散する。生育期間中全期間を通して発生するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
62	野菜 (アブラナ 科)	ダイコン	35,020	1,044	1	アブラムシ類	△	24	△	発3,147ha 防7,988ha	9.0% 22.8%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	-	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	○	ダイコンには、主にダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシが寄生する。葉裏に群がって吸汁加害し、葉を黄変させる。多発した場合は、葉が枯死することもある。また、ウイルスを媒介することにより大きな被害を及ぼす。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
63	野菜 (アブラナ 科)	ダイコン	35,020	1,044	1	コナガ	△	23	×	発1,063ha 防-	3.0% -	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	2	10	○	-	△	関係機関52位	野菜生産出 荷安定法	A	○	各種のアブラナ科野菜を食害する。幼虫は、葉の表皮を残して葉緑層を食害し、生育を遅らせる。また、定植後間もない苗の芯葉部が食害されると、生長が止まる。アブラナ科野菜や雑草で1年中活動し、関東以西の暖地では、年間10~13回発生する。北日本では、暖地からの長距離移動個体とその年の発生源になると考えられている。晩春から初夏に多発し、キャベツなどアブラナ科野菜に大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
64	野菜 (アブラナ 科)	ダイコン	35,020	1,044	1	ハスモンヨトウ	×	11	×	発676ha 防-	1.9% -	C	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	2	10	○	-	△	関係機関20位	野菜生産出 荷安定法	A	×	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するが、ダイコンでの発生は多くない。
65	野菜 (アブラナ 科)	はくさい	18,160	536	1	アブラムシ類	△	21	○	発1,952ha 防14,175ha	10.7% 78.1%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	4	2	8	○	-	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	○	はくさいには、主にダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシが寄生する。葉裏に群がって吸汁加害し、葉を黄変させる。多発した場合は、生育が著しく阻害されるため、結球が遅れて球が小さくなる。また、ウイルスを媒介し、モザイク病を発生させるが、被害程度は軽い。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
66	野菜 (アブラナ 科)	はくさい	18,160	536	1	コナガ	△	21	○	発1,415ha 防19,859ha	7.8% 109.4%	A	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	4	3	12	○	-	△	関係機関52位	野菜生産出 荷安定法	A	○	各種のアブラナ科野菜を食害する。幼虫は、葉の表皮を残して葉緑層を食害し、生育を遅らせる。また、定植後間もない苗の芯葉部が食害されると、芯止まりとなって結球できなくなる。アブラナ科野菜、雑草等で1年中活動し、関東以西の暖地では、年間10~13回発生する。北日本では、暖地からの長距離移動個体とその年の発生源になると考えられている。晩春から初夏に多発し、キャベツ、はくさいなどアブラナ科野菜に大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
67	野菜 (アブラナ 科)	はくさい	18,160	536	1	ハスモンヨトウ	×	10	△	発424ha 防7,905ha	2.3% 43.5%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	4	3	12	○	-	△	関係機関20位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
68	野菜 (アブラナ 科)	ブロッコリー	13,500	397	1	コナガ	×	6	×	発468ha 防-	3.5% -	C	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	3	3	9	○	-	△	関係機関52位	-	A	×	各種のアブラナ科野菜を食害する。幼虫は、葉の表皮を残して葉緑層を食害し、生育を遅らせる。また、定植後間もない苗の芯葉部が食害されると、生長が止まる。アブラナ科野菜や雑草で1年中活動し、関東以西の暖地では、年間10~13回発生する。北日本では、暖地からの長距離移動個体とその年の発生源になると考えられている。晩春から初夏に多発し、キャベツなどアブラナ科野菜に大きな被害を及ぼすが、ブロッコリーでの発生は多くない。
69	野菜 (アブラナ 科)	ブロッコリー	13,500	397	1	ハスモンヨトウ	×	5	△	発748ha 防2,750ha	5.5% 20.3%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	3	2	6	○	-	△	関係機関20位	-	A	○	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。老齢幼虫は、花蕾を食べて大きなふんを出し、食用にならない。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害する。
70	野菜 (アブラナ 科)	ブロッコリー	13,500	397	2	黒腐病	×	7	×	発201ha 防-	1.5% -	C	△	比較的气温 が低く、降雨 が多い年に発 生が多い	△	種子伝染 ・土壌伝染 ・雨滴による 伝染	B	△	3	3	9	×	-	×	-	-	B	×	主に葉に発生する。子葉に発生した場合は、頂部のへこんだ部位から黒変し、やがて子葉は枯死する。成葉では、下葉から発生して、葉縁に葉脈を中心として、くさび型の黄色病斑を生じ、病斑は次第に拡大して枯死する。一般に発生は、晩秋に多く、夏期及び冬期にはほとんど発生しない。ブロッコリーでの発生は多くない。
71	野菜 (ウリ科)	かぼちゃ	17,700	280	1	アブラムシ類	×	3	×	発65ha 防-	0.4% -	C	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	3	9	○	-	△	関係機関22位	-	A	×	カボチャには、ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ等が寄生する。葉裏に群がって吸汁し、新葉では巻き上がって萎縮することもある。高密度になると、成幼虫の出す分泌物にすす病が発生する。また、ウイルスを媒介することにより大きな被害を及ぼす。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するが、かぼちゃでの発生は多くない。
72	野菜 (ウリ科)	かぼちゃ	17,700	280	2	うどんこ病	×	2	×	発84ha 防-	0.5% -	C	○	25℃前後のや や乾燥条件 (湿度50~ 80%)で急速に 増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	△	3	2	6	○	-	×	-	-	A	×	葉面にうどん粉を撒き散らしたような白い粉状のかびが生じる。病勢が進むと葉面全体が汚白色の菌体で被われて枯れ上がる。棘に被害に作られた子のう散らばり、翌年子のう胞子を飛ばして、第一次伝染する。その後、葉上にできた分生胞子によって伝染を繰り返す。多発すると防除が困難になることが多いが、かぼちゃでの発生は多くない。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)										総合 評価	評価コメント	
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等	関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	I国の施策 上の重要 性			評価3
73	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	1	アザミウマ類	○	30	○	発1,306ha 防11,763ha	11.0% 99.3%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(ネオニコチノイド、クロルフェナピル、DINOCスルファミド等) ・抵抗性がある薬剤多数(23種:カンキョウアザミウマ、ウイルス媒介(メロン黄化えそ病等))	○	農業者35位 関係機関32位	野菜生産出荷安定法	A	○	ミカンキョウアザミウマ、ミナミキョウアザミウマ等。極めて広食性であり、野菜、果樹、花き類など多くの作物を加害する。施設栽培では周年発生し、年間発生回数もかなり多い。葉や花を直接吸汁するだけでなく、ウイルスを媒介して、大きな被害を及ぼす。薬剤抵抗性も発達しており、防除が困難であるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
74	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	1	アブラムシ類	○	38	○	発2,368ha 防17,296ha	20.0% 146.1%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・キュウリモザイクウイルス(CMV)等を媒介 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(イミダクロプリド、アセタミプリド等) ・抵抗性がある薬剤多数(42種:ワタアブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出荷安定法	A	○	キュウリには、ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ等が寄生する。葉裏に群がって吸汁し、新葉では巻き上がって萎縮することもある。高密度になると、成幼虫の出す分泌物にすす病が発生する。また、ウイルス媒介することにより大きな被害を及ぼす。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
75	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	1	コナジラミ類	△	26	○	発917ha 防10,576ha	7.7% 89.3%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・退縮黄化病(COYV)を媒介 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(クロチアネジリン、PAF、メトキサム、ヒトロジン等) ・抵抗性がある薬剤多数(22種:オンシツコナジラミ)	△	農業者35位	野菜生産出荷安定法	A	○	寄主範囲は極めて広い。施設内では年間10回以上発生する。COYV等のウイルス媒介し、キュウリ退縮黄化病等を発生させる。また、多発すると排泄物にすす病が発生し、着色異常となる。コナジラミ類は、薬剤抵抗性が非常に強い防除が困難であるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
76	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	1	ハスモンヨトウ	×	14	△	発357ha 防2951ha	3.02% 24.9%	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメトリン、PAF、メトキサム、BT、エフェンプロックス等) ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて広食性。キュウリでは、葉、果実、花蕾、新梢を食害する。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を食害する。幼虫が大きくなると食害量も増え、葉を食い尽くすこともある。老齢幼虫は、果実を好んで食害するため、密度が低くても大きな被害となる。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が無いため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
77	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	2	うどんこ病	○	39	○	発3,700ha 防28,489ha	31.3% 240.6%	A	○	25℃前後のや や乾燥条件 (湿度50~ 80%)で急速に 増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性発達リ スク高	×	-	野菜生産出荷安定法	A	○	葉面にうどん粉を撒き散らしたような白い粉状のかびが生じる。病勢が進むと葉面全体が汚白色の菌体で被われて枯れ上がる。秋に被害葉に作られた子う胞で越冬し、翌年子う胞子を飛散して、第一次伝染する。その後、葉上にできた分生胞子によって伝染を繰り返す。多発すると防除が困難になることが多い。国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
78	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	2	褐斑病	○	30	○	発1,802ha 防-	15.2% -	A	○	高温・多湿で急 速に増殖	○	分生胞子の 風による飛散 ・種子伝染	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI、ペンシル、SDH)	○	農業者29位 関係機関42位	野菜生産出荷安定法	A	○	主に葉に発生する。はじめ淡褐色の小斑点を生じ、その後、病斑が拡大して灰褐色になる。病勢が進むと病斑が融合して拡大する。多発時には、幼果が花弁を通じて感染し、黄変ししなびを起すこともある。発病は、下葉から上葉へ伝染する。発病の適温は25~30℃、多湿条件下で多発する。病原菌は、被害葉とともに土壌中に残り、もしくは農業用資材に付着して越冬して伝染源となる。栽培後期に病勢が急速に進展すると、枯れ上がって著しい減収を招くため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
79	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	2	灰色かび病	○	32	×	発555ha 防-	4.7% -	B	○	低温(20℃前 後)・多湿で急 速に増殖	○	乾燥条件下 分生胞子が 活発に飛散	A	○	5	3	15	○	・病原菌の耐性リス ク高 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI、MBC、Nフェニルカーバマート等)	×	-	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて多発性の病菌。葉、花、幼果に発生する。開花後の花きに侵入し、灰褐色に腐らせる。幼果では、着果部から腐敗が広がり、果実全体を腐らせる。菌核の形で地表面で生存し、越冬して伝染源となる。果実に大きな被害が発生するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
80	野菜 (ウリ科)	キュウリ	11,840	1,463	2	べと病	○	39	○	発4,115ha 防30,624ha	34.8% 258.6%	A	○	気温20~24℃の 多湿条件下で、葉 が濡れていると きに急速に増殖	○	分生胞子が風 により飛散して葉 面に付着し、遊 走子を生じて気 孔から侵入する	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI) ・病原菌の耐性リス ク高	×	-	野菜生産出荷安定法	A	○	葉のみに発生する。本葉では、はじめ淡黄色の小病斑が現れ、やがて葉脈に区切られ角ばった黄褐色の斑点に発達する。激しい場合は、下葉から枯れ上がり、減収するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
81	野菜 (ウリ科)	スイカ	11,500	569	1	アブラムシ類	×	19	○	発1,799ha 防-	15.6% -	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	3	9	○	・キュウリモザイクウイルス(CMV)等を媒介 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(イミダクロプリド、アセタミプリド等) ・抵抗性がある薬剤多数(42種:ワタアブラムシ)	△	関係機関22位	-	A	○	スイカには、ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ等が寄生する。葉裏に群がって吸汁し、新葉では巻き上がって萎縮することもある。高密度になると、成幼虫の出す分泌物にすす病が発生する。また、ウイルス媒介することにより大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。
82	野菜 (ウリ科)	スイカ	11,500	569	2	炭疽病	×	17	○	発1,166ha 防16,389ha	10.1% 142.5%	B	○	気温22~28℃の 多湿条件下で、葉 が濡れていると きに急速に増殖	○	分生胞子の 水の飛沫(降 雨等)による 飛散 ・種子伝染	A	△	3	3	9	△	・薬剤抵抗性フェーズⅡ(MBC)	×	-	-	B	×	茎葉及び果実に発生する。はじめ葉に淡褐色油浸状の小病斑を生じ、後に拡大、激しい場合は融合して大型病斑となる。果実では、油浸状の小病斑からやがて黒褐色のへこんだ病斑となる。多発すると葉がほとんど枯死し、果実の肥大が抑制されて減収する。露地では一般に梅雨の時期から発生する。
83	野菜 (ウリ科)	スイカ	11,500	569	2	つる枯病	×	18	○	発1,292ha 防21,079ha	11.2% 183.3%	B	○	高温・多湿で 急速に増殖	○	胞子の飛散 ・種子伝染	A	△	3	3	9	×	-	×	-	B	×	茎葉、果梗及び果実に発生する。茎では、地際の部分から発生することが多く、はじめ節の部分に油浸状となって凹み、ヤニを出す。後に灰褐色となって裂目ができる。病斑上には、無数の小黒点(柄子殻及び子のう殻)が認められる。病勢が進むと被害部位から上は枯れることが多い。6月以降に雨が降り続くとき激しくまん延する。特につるが繁茂して通風が悪い場合は発生しやすい。	
84	野菜 (ウリ科)	メロン	8,206	644	1	アザミウマ類	×	3	×	発220ha 防-	2.7% -	C	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	3	9	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(ネオニコチノイド、クロルフェナピル、DINOCスルファミド等) ・抵抗性がある薬剤多数(23種:カンキョウアザミウマ、ウイルス媒介(メロン黄化えそ病等))	△	関係機関27位	-	A	×	ミカンキョウアザミウマ、ミナミキョウアザミウマ等。極めて広食性であり、野菜、果樹、花き類など多くの作物を加害する。施設栽培では周年発生し、年間発生回数もかなり多い。葉や花を直接吸汁するだけでなく、ウイルス媒介して、大きな被害を及ぼすが、メロンの発生は多くない。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害 虫区 分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント				
							7 分布	発生報告 都道府県 数	イ 発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7 気象条件 による増殖	生態	イ 拡散性	生態	評価2	7 加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ 防除の 困難性	課題等			関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	I 国の施策 上の重要 性	評価3
85	野菜 (ウリ科)	メロン	8,206	644	1	アブラムシ類	×	4	×	発150ha 防-	1.8% -	C	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	3	3	9	○	・キュウリモザイクウ イルス(CMV)等を 媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズII(イミダクロプリ ド、アセタミプリド等) ・抵抗性がある薬剤 多数(42種:ワタア ブラムシ)	△	関係機関22位	-	A	×	メロンには、主にワタアブラムシが寄生する。葉裏に群がって吸汁し、新葉では巻き上がって萎縮することもある。高密度になると、成幼虫の出す分泌物にすす病が発生する。また、ウイルスを媒介することにより大きな被害を及ぼす。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するが、メロンでの発生は多くない。
86	野菜 (ウリ科)	メロン	8,206	644	2	つる枯病	×	4	×	発30ha 防-	0.3% -	C	○	高温・多湿で 急速に増殖	○	胎子の飛散 ・種子伝染	A	△	3	3	9	×	-	×	-	B	×	茎葉、果梗及び果実に発生する。茎では、地際部分から発生することが多く、はしめ節部分が油浸状となって凹み、ヤニを出す。後に灰褐色となって裂目ができる。病斑上には、無数の小黒点(病子殻及び子の殻)が認められる。病勢が進むと被害部位からは枯れることが多い。6月に降る雨が降り続くとき発生しやすくなる。特につるが繁茂して通風が悪い場合は発生しやすいが、メロンでの発生は多くない。	
87	野菜 (キク科)	レタス	20,900	902	1	アブラムシ類	×	17	○	発1,224ha 防26,346ha	5.9% 126%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	△	・レタスモザイク病ウ イルス(CMV、LMV) を媒介	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	○	ジャガイモヒゲナガアブラムシ、ノゲンクレアアブラムシ、タイワンヒゲナガアブラムシ等が発生する。新葉の葉裏や茎に群がって寄生し、吸汁加害するとともに、ウイルス病を媒介するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
88	野菜 (キク科)	レタス	20,900	902		オオタバコガ	×	12	○	発1,047ha 防22,955ha	5.0% 109.8%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・抵抗性がある薬剤 多数(48種)	△	関係機関32位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性で各種野菜類、花卉類の葉を食害するほか、新芽、花蕾、果実、茎の中などに潜り込んで加害する。キク科植物では、レタス、キクで被害が大きい。幼虫が浅い土中に潜り、蛹態で越冬する。西日本では、露地でも越冬可能。高温乾燥の年に発生が多い。ハウス内及び露地で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象として、適期に防除を行う必要がある。
89	野菜 (キク科)	レタス	20,900	902	1	ハスモンヨトウ	×	17	△	発315ha 防6,921ha	1.5% 33.1%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェ ーズII(シベルメト リン、PAP、メソメ リル、BT、エトフェンブ ロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が少ないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
90	野菜 (キク科)	レタス	20,900	902	2	菌核病	×	18	○	発3,140ha 防20,444ha	15.0% 97.8%	B	○	約20℃で多 湿のとき多発	○	子のう胎子の 風による飛散	A	○	5	3	15	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	A	○	外葉の基部から発病することが多い。初め褐色水浸状の病斑ができ、しだいに広がって株元から腐敗しはじめ、やがて株全体が軟腐する。腐敗した株の葉柄基部などに、白色で綿状の菌糸が大量に形成され、これが灰色の固まりとなり、やがて黒色の菌核の形成となる。胎子は雨滴や風によって飛散し、植物体に到達する。高冷地や低温期の施設栽培において、やや低温で多湿のとき発生が多く、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
91	野菜 (キク科)	レタス	20,900	902	2	灰色かび病	×	18	○	発1,086ha 防20,721ha	5.2% 99.1%	B	○	約20℃で多 湿のとき多発	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	○	・病原菌の耐性リス ク高 ・薬剤抵抗性フェ ーズII(GoI, MBC, N フェニルカーバマ ト等)	×	-	野菜生産出 荷安定法	A	○	初め淡褐色で水浸状の病斑ができ、急速に広がって褐色に腐敗し、病斑上に特有の灰褐色でピロッド状のかびが寄生する。外葉の基部から発病することが多いが、凍害などの損傷を受けると、結球葉上からも発病する。菌糸が被害残遺とともに残り、菌核は地上でも越冬伝染源となる。低温で多湿のとき発生が多く、生育期間中は、病斑上に多量に形成される分生胞子により伝染をくり返すため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
92	野菜 (セリ科)	にんじん	18,920	680	1	アブラムシ類	×	7	×	発1.67ha 防6.67ha	0.01% 0.04%	C	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	4	2	8	○	・ニンジン黄化病ウ イルス、ニンジンモ ザイク病ウイルス (CURLV, CMV)等を 媒介 ・抵抗性がある薬剤 多数(74種:モモア カアブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	×	ニンジンフタオアブラムシ、モモアカアブラムシ、ニンジンアブラムシ等が発生する。芯葉に寄生して吸汁し、伸長を阻害する。生態は不明な点が多い。ウイルス病を媒介する。にんじんでの発生は多くない。
93	野菜 (セリ科)	にんじん	18,920	680	1	ハスモンヨトウ	×	8	×	発39.8ha 防621.8ha	0.21% 0.33%	C	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	4	2	8	○	・薬剤抵抗性フェ ーズII(シベルメト リン、PAP、メソメ リル、BT、エトフェンブ ロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出 荷安定法	A	×	極めて広食性。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が少ないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するが、にんじんでの発生は多くない。
94	野菜 (セリ科)	にんじん	18,920	680	2	黒葉枯病	×	11	○	発2,166ha 防42,865ha	11.5% 226.6%	B	○	28℃前後で 曇雨天と晴天 が交互に経 過するときに 多発	○	分生胞子の 風による飛散 ・種子伝染	A	△	4	2	8	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	B	×	葉、葉柄、茎に発生する。最初褐色～黒褐色で不整形の小さな斑点を生じ、その葉はやや黄化する。病斑は徐々に拡大して互いに融合して大型病斑となる。発病葉は葉縁が上側に巻きこみ、病斑拡大とともに枯死する。菌糸および分生胞子の形で被害植物に付いて長く生存し、また種子にも付着して種子伝染する。このために発芽障害を起こすことも少なくない。分生子はおもに夜間形成され、日中、晴天のときに飛散し、飛散量は降雨のあった数日後に多くなる傾向がある。発病の適温は約28℃で、15℃以下および35℃以上ではほとんど発病しない。
95	野菜 (ナス科)	トマト	12,160	2,325	1	アブラムシ類	○	36	○	発934ha 防7,735ha	7.7% 63.6%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・キュウリモザイクウ イルス(CMV)等を 媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズII(イミダクロプリ ド、アセタミプリド等) ・抵抗性がある薬剤 多数(74種:モモア カアブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性であり、トマトには、ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ等が寄生する。ウイルスを媒介することにより大きな被害を及ぼす。また、成幼虫の出す分泌物にすす病が発生する。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して、移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
96	野菜 (ナス科)	トマト	12,160	2,325	1	コナジラミ類	○	36	○	発1,592ha 防27,202ha	13.1% 223.7%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・トマト黄化葉巻病 (TYLCCV)を媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズII(クロチアニジ ン、チアメキサム、 ピメロジン等) ・抵抗性がある薬剤 多数(22種:オシ コナジラミ)	△	関係機関13位	野菜生産出 荷安定法	A	○	寄生範囲は極めて広い。施設内では年間10回以上発生する。TYLCCV等のウイルスを媒介し、トマト黄化葉巻病等が発生させる。また、多発すると排泄物にすす病が発生し、着色異常となる。コナジラミ類は、薬剤抵抗性が非常に強く防除が困難であるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント				
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等			関係機 関・農業 者の注 目度	アンケ ー ト 結 果	I国の施 策上 の重要 性	評価3
97	野菜 (ナス科)	トマト	12,160	2,325	1	ハスモンヨトウ	△	21	×	発136ha 防718ha	1.1% 5.9%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメトリン、PAE、メスル、BT、エトフェンプロックス等) ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて広食性。トマトでは、葉、果実、花蕾、新梢を食害する。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。幼虫が大きくなると食害量も増え、葉を食い尽くすこともある。老齢幼虫は、果実を好んで食害するため、密度が低くても大きな被害となる。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が低いため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を食害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
98	野菜 (ナス科)	トマト	12,160	2,325	2	疫病	○	39	○	発478ha 防10,229ha	3.9% 84.1%	A	○	雨天等の多湿 条件下で急速に 増殖	△	遊走子により 伝染	A	○	5	3	15	○	病原菌の耐性リス ク高	×	—	野菜生産出荷安定法	A	○	地上部のあらゆる組織を侵す。葉では、不整形の水浸状の斑点が生じ、だいに拡大し大型の病斑になる。茎では、発病部位から上りが枯死する。果実では、大型で不整形の暗褐色の病斑があらわれ、腐敗する。土中で越冬し、まん延するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
99	野菜 (ナス科)	トマト	12,160	2,325	2	すすかび病	×	9	×	発557 ha 防 - ha	4.5% -	C	○	多湿条件下で急 速に増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	2	10	△	薬剤抵抗性フェーズⅡ(QoI, DMJ)	×	—	野菜生産出荷安定法	A	×	葉に発生する。はじめ葉の裏面に淡黄緑色の病斑が現れ、灰褐色粉状のかびを生じる。表面には裏面よりやや遅れて病斑が生じる。被害葉は早期に垂れ下がり、乾燥して全体が濃緑褐色のかびで覆われる。病徴は、葉かび病に類似しており、肉眼での識別は困難である。葉かび病抵抗性品種にも発生するため、生産現場で同定診断を行う必要がある。
100	野菜 (ナス科)	トマト	12,160	2,325	2	灰色かび病	○	40	○	発2,486ha 防18,415ha	20.4% 151.4%	A	○	低温(20℃前 後)・多湿で急 速に増殖	○	乾燥条件下で 分生胞子が 活発に飛散	A	○	5	3	15	○	・病原菌の耐性リス ク高 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI, MBC, Nフェニルカーバマート等)	○	農業者35位 関係機関18位	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて多犯性の病菌。主に果実に発生するが、茎、葉、葉柄なども侵される。果実では、はじめ水浸状の小斑点を生じ、後に暗褐色のくぼんだ病斑となり表面にかびを密生させる。菌核の形で地表で生存し、越冬して伝染源となる。開花後の花弁から侵入し、果実に発病させる。大きな果実の被害が発生するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
101	野菜 (ナス科)	トマト	12,160	2,325	2	葉かび病	○	31	△	発781ha 防 - ha	6.4% -	A	○	20℃以上の多 湿条件下で急 速に増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	2	10	○	薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI, Nフェニルカーバマート)	△	関係機関58位	野菜生産出荷安定法	A	○	気孔から感染し、主に葉に発生する。はじめ表面に淡黄色小斑点を生じ、その裏に灰黄色のピロッド状のかびを密生する。しだいに病斑が拡大して、表面にも同様のかびを生ずる。激しい場合は、葉が枯死する。雨天が続くなど、多湿条件下でまん延しやすいため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
102	野菜 (ナス科)	ナス	10,052	803	1	アザミウマ類	△	22	○	発1,370ha 防9,010ha	13.6% 89.6%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シネテフラン、ニテンピラム、スピノサド、クロルフルプロシロン、ピリプロキシフェン等) ・トスト黄化性エウイリス(TSWV)媒介 ・抵抗性がある薬剤多数(23種、ミカンキイロアザミウマ)	○	農業者20位 関係機関24位	野菜生産出荷安定法	A	○	ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ等。極めて広食性であり、野菜、果樹、花き類など多くの作物を食害する。施設栽培では周年発生し、年間発生回数もかなり多い。葉や花を直接吸汁するだけでなく、ウイルスを媒介して、大きな被害を及ぼす。薬剤抵抗性も発達しており、防除が困難であるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
103	野菜 (ナス科)	ナス	10,052	803	1	アブラムシ類	△	24	○	発1,322ha 防1,804ha	13.1% 17.9%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・キュウリモザイクウイルス(OV)等を媒介 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI) ・抵抗性がある薬剤多数(74種、モモアカアブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出荷安定法	A	○	ナスには、ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ、ジャガイモヒメグサアブラムシ等が寄生する。葉裏に群がって吸汁し、新葉では巻き上がって萎縮することもある。高密度になると、成幼虫の出す分泌物にすす病が発生する。また、ウイルスを媒介することにより大きな被害を及ぼす。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
104	野菜 (ナス科)	ナス	10,052	803	1	オオタバコガ	×	16	△	発450ha 防2,621ha	4.5% 26.1%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・抵抗性がある薬剤多数(48種)	△	関係機関32位	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて広食性。葉、果実、花蕾、新梢を食害する。若齢幼虫は、葉の表皮、生長点部、花を食害し、やがて果実や茎に侵入する。中齢幼虫及び老齢幼虫は、1匹が数個の果実内部に侵入して食害するため、大きな被害となる。幼虫が浅い土中に潜り、蛹態で越冬する。西日本では、露地でも越冬可能。高温乾燥の年に発生が多い。ハウス内及び露地で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を食害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
105	野菜 (ナス科)	ナス	10,052	803	1	ハスモンヨトウ	△	21	△	発539ha 防1,137ha	5.4% 11.3%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメトリン、PAE、メスル、BT、エトフェンプロックス等) ・抵抗性がある薬剤多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて広食性。ナスでは、葉、果実、花蕾、新梢を食害する。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。幼虫が大きくなると食害量も増え、葉を食い尽くすこともある。老齢幼虫は、果実を好んで食害するため、密度が低くても大きな被害となる。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が低いため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を食害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
106	野菜 (ナス科)	ナス	10,052	803	1	ハダニ類	△	26	○	発1,629ha 防9,145ha	16.1% 91.0%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 によって拡散 ・管理作業 者に着して拡 散	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(クロルフェナピル、ヘキシチアゾクス等) ・抵抗性がある薬剤多数(92種、モモアカアブラムシ)	○	農業者35位 関係機関64位	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて広食性であり、ナスには、ナミハダニ、カンザワハダニ等が寄生する。ナスでは、葉に白色の小斑点が生じ、ひどくなると葉裏に落ちる。被害が激しい場合には、新芽にも多数寄生するため、株の生育が止まって減収する。高温乾燥条件下で増加する傾向があり、梅雨明け後に好天が続くと急増して被害が拡大するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
107	野菜 (ナス科)	ナス	10,052	803	2	うどんこ病	△	25	○	発1,415ha 防6,117ha	14.1% 60.9%	A	○	28℃前後のや や乾燥条件 (湿度50~ 80%)で急速に 増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	2	10	×	—	△	関係機関64位	野菜生産出荷安定法	A	○	はじめ葉の表面に点々と白いかびがかすかに生える。しだいに葉全体に広がり、うどん粉をふりかけたように白くなり、葉の表面にもかびが生える。発病がひどい時には下葉から落葉する。病気が進展してからは、防除が困難となるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
108	野菜 (ナス科)	ナス	10,052	803	2	灰色かび病	△	23	×	発205ha 防-	2.0% -	B	○	多湿条件下で急 速に増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	○	・病原菌の耐性リス ク高 ・薬剤抵抗性フェーズⅢ(QoI, MBC, Nフェニルカーバマート等)	×	—	野菜生産出荷安定法	A	○	極めて多犯性の病菌。主に果実に発生するが、茎、葉、葉柄なども侵される。果実では、はじめ水浸状の小斑点を生じ、後に暗褐色のくぼんだ病斑となり表面にかびを密生させる。菌核の形で地表で生存、越冬して伝染源となる。開花後の花弁から侵入し、果実の被害が大きいため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント				
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等			関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	I国の施策 上の重要 性	評価3
109	野菜 (ナス科)	ばれいしよ	81,500	1,149	1	アブラムシ類	×	18	○	発15,115ha 防153,772ha	18.5% 188.7%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・葉巻ウイルス、Y モザイクウイルス (PLRV、CMV)等を 媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(イミダクロ リド、アセチアリ ド等) ・抵抗性がある薬剤 多数(42種:ワタア ブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	○	ばれいしよには、モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ等が寄生する。葉への吸汁による被害はほとんどないが、葉巻病やYモザイク病等、多くのウイルスを媒介し、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
110	野菜 (ナス科)	ばれいしよ	81,500	1,149	2	疫病	×	19	○	発18,756ha 防432,440ha	23.0% 530.6%	B	○	開花期頃から 雨天が続くと急 速に増殖	△	遊走子により 伝染	A	○	5	3	15	○	病原菌の耐性リス ク高	△	関係機関23位	野菜生産出 荷安定法	A	○	開花期の頃、下葉に暗緑色の斑点を生じ、次第に大型となり葉裏に霜のようなかびを生ずる。激しい場合は、数日で畑一面に広がり、腐って臭気を出すこともある。収穫期に雨が降ると塊茎に疫病菌が侵入して罹病する。本病菌は、主として罹病した塊茎で越冬し、翌年の伝染源となる。気温15℃以上で降雨などにより湿度が高くなると多発するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
111	野菜 (ナス科)	ピーマン	3,402	463	1	アブラムシ類	×	11	○	発194ha 防2,290ha	5.7% 67.3%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	○	・キュウリモザイク ウイルス(OMV)等を 媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ ・抵抗性がある薬剤 多数(74種:モモア カアブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	○	ピーマンには、ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ等が寄生する。ウイルスを媒介することにより大きな被害を及ぼす。また、成幼虫の出す分泌物にす病が発生する。単為生殖で急速に増殖し、高密度になると有翅虫が発生して移動分散する。広食性であり、他の作物や雑草の間で移動するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
112	野菜 (ナス科)	ピーマン	3,402	463	1	タバコガ	×	11	△	発253ha 防995ha	7.4% 29.2%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	4	2	8	×	-	△	農業者29位	野菜生産出 荷安定法	B	×	幼虫による葉の食害はほとんど問題にならないが、幼虫が果実内に食入し、内部を食害する。幼虫が食入した果実は落果しやすくなる。若齢幼虫が果実に食入するため、収穫時被害に気づかないまま出荷されることが多く、市場や消費者の手に渡って問題になることが多い。被害は露地栽培、雨除け栽培で比較的多い。
113	野菜 (ナス科)	ピーマン	3,402	463	1	オオタバコガ	×	11	○	発67ha 防2,239ha	2.0% 65.8%	A	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	4	2	8	○	・抵抗性がある薬剤 多数(48種)	△	関係機関32位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。葉、果実、花蕾、新梢を食害する。若齢幼虫は、葉の表皮、生長点部、花を食害し、やがて果実や茎に食入する。中齢幼虫及び老齢幼虫は、1匹が数個の果実内部に食入して加害するため、大きな被害となる。幼虫が浅い土中に潜り、蛹態で越冬する。西日本では、露地でも越冬可能。高温乾燥の年に発生が多い。ハウス内及び露地で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
114	野菜 (ナス科)	ピーマン	3,402	463	1	ハスモンヨトウ	×	6	△	発72ha 防697ha	2.1% 20.5%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	△	4	2	8	○	・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(シベルメト リン、PAP、メソミ ル、BT、エトフン プロップ)等 ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。ピーマンでは、葉、果実、花蕾、新梢を食害する。ふ化幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。幼虫が大きくなると食量も増え、葉を食い尽くすこともある。老齢幼虫は、果実を好んで食害するため、密度が低くても大きな被害となる。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
115	野菜 (ナス科)	ピーマン	3,402	463	2	うどんこ病	×	10	○	発533ha 防2,759ha	15.7% 81.1%	B	○	28℃前後のや や乾燥条件 (湿度50~ 80%)で急速に 増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	4	3	12	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	A	○	葉に発生する。はじめ葉の裏面に霜状のかびを生じ、その部分の表側に深い黄色の斑紋が現れる。本菌は、内部寄生性のため、他の植物のうどんこ病のように葉の表面に白色のかびが盛り上がり、病徴が不明瞭であり、薬剤の効果も現れにくいため、防除の徹底が必要であり、国の発生予察の対象とし、適期に防除を行う必要がある。
116	野菜 (ユリ科)	タマネギ	24,540	833	1	アザミウマ類	×	14	○	発14,156ha 防68,128ha	57.7% 277.6%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・ネギアザミウマがタ マネギ葉斑病ウイル ス(YSV)を媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(シナフラン 、アセチアリド、 サド、カルフォル アスロン、ピリプロ キシフェン等)	△	関係機関27位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。タマネギでは、成虫・幼虫が主に葉を食害してかすり状の白斑を生ずる。玉の肥大が妨げられるため、小玉が多くなり減収する。また、生育初期に被害を受けたタマネギは、貯蔵中に芯腐れ症状の腐敗病にかかりやすい。採種栽培では、花球での食害によって結実不良となる。露地では年間3~6世代を繰り返して加害するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
117	野菜 (ユリ科)	タマネギ	24,540	833	1	アブラムシ類	×	2	×	発8ha 防-	-	C	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・ネギ萎縮病ウイル ス(OVDV)を媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(イミダク ロリド、アセチ アリド等) ・抵抗性がある薬剤 多数(42種:ワタ アブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	×	ワタアブラムシ、ネギアブラムシ等が寄生する。ネギアブラムシは、葉に群がって吸汁し、大発生すると成長を阻害する。また、ネギ萎縮病を媒介するとも言われている。生態は不明な点が多いが、タマネギでの発生は多くなく、通常大きな被害はない。
118	野菜 (ユリ科)	タマネギ	24,540	833	1	ネギハモグリバエ	×	3	○	発4,100ha 防-	16.7% -	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	5	1	5	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	B	×	雌成虫は葉面に点々と小さな穴をあけ、しみ出た汁液を摂食する。卵は葉肉内側の表面に付着させる形で産下され、ふ化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害し、白い不規則な線状の食害痕を生じさせる。ここ数年、北海道において幼虫が鱗茎まで食入し、腐敗させるなど大きな被害が発生している。同様に被害が今後も継続して発生するを見極めてから国の発生予察の対象とするかを判断する。
119	野菜 (ユリ科)	タマネギ	24,540	833	2	さび病	×	6	×	発1ha 防-	-	C	×	タマネギは、本 病に対して、一 般的に抵抗性 がある	○	夏胞子の風 による飛散	B	△	5	1	5	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	B	×	本菌は、寄生性に分化型が見られ、ネギ、タマネギ、ニンニクを侵す系統(型)とニラ型、ラッキョウ型の3分化型が知られている。タマネギは、本病に対して一般的に抵抗性がある。
120	野菜 (ユリ科)	タマネギ	24,540	833	2	白色疫病	×	15	○	発820ha 防12,602ha	3.3% 51.3%	B	○	雨天等の多湿 条件で急速に 増殖	△	遊走子の雨 滴による伝染	A	○	5	2	10	×	-	×	-	野菜生産出 荷安定法	A	○	主に葉に発生する。初め葉の中央から先端部、不整形で周囲やや不鮮明な大きさ1~3cmの暗緑色、水浸状の病斑を形成する。その後、病斑は拡大して油浸状、青白色となり、病斑部で曲がって葉は下垂し、こより状に先枯れとなる。病斑が古くなると白色ないし灰白色になり、健全部との境は明瞭になる。排水不良な畑で発生が多い。降雨などにより湿度が高くなると多発するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
121	野菜 (ユリ科)	タマネギ	24,540	833	2	べと病	×	16	○	発2,706ha 防16,025ha	11.0% 65.3%	B	○	秋期の降雨が 多いと急速に 増殖 ・春期は、15℃ 前後で雨天が続 くと急速に増殖	○	・卵胞子による 土壌伝染 ・分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	△	病原菌の耐性リス ク中	△	関係機関32位	野菜生産出 荷安定法	A	○	葉が光沢のない淡黄緑色となって外側に湾曲し、生育が抑制される。激しい場合は、衰弱して枯死することもある。雨と気温の影響で土壌中の胞子や分生胞子による感染が広がるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害 虫区 分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)				評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント					
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性			課題等	関係機 関・農業 者の注 目度	アンケ ー 結果	I国の施 策上 の重要 性	評価3
122	野菜 (ユリ科)	にら	2,242	259	1	ロビンネダニ	×	1	×	発0ha 防-	0%	C	○	高温・多湿で 急速に増殖	×	歩行	B	△	3	3	9	○	・薬剤抵抗性フェ ーズII(DMTF剤) ・抵抗性がある薬剤 多数(22種)	×	-	-	A	×	幼・成虫が根部に寄生して加害するため、地上部の生育が抑制され、寄生密度が高くなると枯死することがある。また、フザリウム菌と密接な関係にあり、病害の発生助長要因になる。一度発生すると作物がなくてもヒポブス(第2若虫)の形で土壌中に長期生存する。酸性土壌で増殖が多いと言われている。年間十数世代を経過する。にらでの発生は多くない。
123	野菜 (ユリ科)	にら	2,242	259	2	白斑葉枯病	×	1	×	発0ha 防-	0%	C	○	多湿で急速に 増殖	○	分生胞子の 風による飛散	A	△	3	3	9	×	-	×	-	-	B	×	葉に白色の小斑点を散生し、のちに円形ないし葉脈に沿って長紡錓形に拡大する。中央部は灰白色で、周辺部は葉脈に沿って淡黄色を帯び、健全部との境は不明瞭である。病斑部はやがて淡褐色に枯死する。被害葉上に形成された菌核の形で越冬し、これらから生ずる分生胞子が第一次伝染源となる。ハウスやトンネル栽培では、多湿条件のときに散発し、露地栽培でも4~5月頃に降雨が続くと多発することもあるが、にらでの発生は多くない。
124	野菜 (ユリ科)	にんにく	2,252	129	2	さび病	×	1	△	発120ha 防-	5.3%	B	○	低温・多湿で 多発	○	夏胞子の風 による飛散	A	△	2	3	6	×	-	×	-	-	B	×	葉および花茎に発生する。初め表面に1~3mmの楕円形~紡錓形のやや隆起した黄色の病斑(夏胞子層)を生じ、後にその病斑は縦に裂けて中から黄褐色の粉末(夏胞子)を出す。収穫期頃には、黄褐色の病斑に接して黒色~灰色で光沢のある病斑(冬胞子層)を生ずる。激しく発生したときには、葉が枯れ上がる。胞子の形で被害植物に付着して越冬し、次作への伝染源になる。春季に比較的低温で降雨の多い場合に多発する。気温が25℃以上になると発病しなくなる。
125	野菜 (ユリ科)	にんにく	2,252	129	2	葉枯病	×	1	△	発139ha 防-	6.2%	B	○	高温・多雨で 多発	○	分生胞子の 風による飛散	A	×	2	2	4	×	-	×	-	-	B	×	おもに葉に発生するが、葉鞘にも発病する。初め白色の白斑を生ずるが、しだいに拡大して中央部赤褐色、周辺淡褐色の紡錓形ないし楕円形の病斑となり、黒色すす状のかびを密生する。被害葉は病斑を中心に葉脈に沿って黄変し、甚だしいときには葉が枯れ上がる。罹病植物上の菌糸、分生子あるいは子のう殻で越冬し、翌春の伝染源となる。テンサイ、タマネギ、マメ科牧草にも感染する。
126	野菜 (ユリ科)	にんにく	2,252	129	2	春腐病	×	2	○	発485ha 防-	21.5%	B	○	低温・多湿で 多発	△	細菌の雨滴 による伝播	A	△	2	3	6	×	-	△	関係機関58位	-	B	×	葉基部あるいは葉鞘から発病する。暗緑色、水浸状の病斑を生じ、褐色に軟化腐敗する。病原菌は季節風や凍霜害によってきた菌から侵入する。気温10℃前後の低温、多湿条件下で発病し始め、20℃以上になると少なくなる。また、融雪直後から発病し、低温、多湿環境では収穫期まで続き、強風後の多湿あるいは透明マルチ栽培で多発するとの報告がある。タマネギ腐敗病と同一の病原菌によって発生する。
127	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	1	アザミウマ類	△	28	○	発9,777ha 防30,734ha	42.4% 133.4%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・ネギアザミウマが 本邦発病ウイルス (YSV)を媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズIII(シノテフラン、 ニテンピラム、スピノ サド、クロルフルプ スロン、ピリプロキ シフェン等)	△	関係機関58位	野菜生産出 荷安定法	A	○	成・幼虫がおもに葉を食害してかすり状の白斑を生ずる。生育初期に多発すると、葉の銀白ないし黄白色の白斑は褐変して芯葉は伸長不良となり、葉が曲がり萎凋枯死することもある。通常は成虫、暖地では一部幼虫で越冬し、寒冷地では6月、暖地では3月から初冬まで活動する。寒冷地では3世代前後、暖地では6世代前後、施設内では10世代以上を繰り返して加害するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
128	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	1	アブラムシ類	△	26	△	発1,139ha 防8,214ha	5.0% 35.7%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・ネギ萎縮病ウイル ス(OVDV)を媒介 ・薬剤抵抗性フェ ーズII(イミダクロプリ ド、アセタミプリド) ・抵抗性がある薬剤 多数(42種:ワタア ブラムシ)	△	関係機関22位	野菜生産出 荷安定法	A	○	ワタアブラムシ、ネギアブラムシ等が寄生する。葉や茎にコロニーを形成して吸汁加害する。葉は巻いたり萎凋したりする。ワタアブラムシは、野外では4~11月に連続して発生するが、夏季の発生は少ない。冬期間、寒冷地の露地では卵で越冬し、西南暖地の露地では単為生殖で増殖する。施設内では、周年発生する。ウイルス病を媒介して被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
129	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	1	シロイチモジヨトウ	△	21	△	発1,812ha 防7,812ha	7.9% 33.9%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェ ーズII(IGR剤) ・抵抗性がある薬剤 多数(32種)	△	関係機関46位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。幼虫が葉を食害する。孵化直後の1齢幼虫は、集団で葉の先端に近い部分や折れた部分の内側から穴を開けて葉身に侵入し、表皮を残して葉肉だけを食害するため、被害を受けた葉は白化して枯れる。若齢期の幼虫はほとんどが葉身に生息するが、4齢以降は分散して葉に穴を開けるように加害する。中後期の被害症状はハスモンヨトウによるものと類似し、被害症状では種を特定できない。本種は休眠性がなく、施設では周年発生し被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
130	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	1	ハスモンヨトウ	×	15	△	発742ha 防8,683ha	3.22% 37.7%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェ ーズII(シベルメト リン、PAP、メソメ ル、BT、エトファンブ ロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	△	関係機関20位	野菜生産出 荷安定法	A	○	極めて広食性。ネギでは、幼虫が小さいときは、表皮だけを食害するが、中~老齢幼虫が多発した場合、葉が全て無くなることもある。ネギでの被害は、シロイチモジヨトウとほぼ同じであるが、若齢幼虫が葉身の中に潜り込むことは少ない。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性が少ないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
131	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	2	黒斑病	△	25	○	発5,446ha 防21,577ha	23.6% 93.7%	A	○	降雨が多い 場合多発	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	2	10	×	-	×	-	-	A	○	葉・花茎に紡錓形の病斑で、淡黒色すす状のかびを同心状に生じる。病斑から上部に長く枯れ上がり、ひどくなると上下に枯死して折れ曲がる。ハウスより露地栽培で多い傾向がある。梅雨期と初秋期に降雨が多い場合多発するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
132	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	2	さび病	○	30	○	発2,850ha 防22,443ha	12.4% 97.4%	A	△	比較的低温 で降雨が多い と多発傾向	○	夏胞子の風 による飛散	A	○	5	3	15	×	-	×	-	-	A	○	紡錓形あるいは長楕円形の橙黄色のやや隆起した小斑点を生ずる。発病が甚だしい場合は枯死することがある。春から秋にかけて発生するが、夏には一時終息する。春と秋に降雨が多いと多発する傾向があり、国は発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
133	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	2	葉枯病	×	4	×	発544ha 防-	2.4%	C	○	15~20℃で 降雨が続く場 合多発	○	胞子の風によ る飛散	A	○	5	3	15	×	-	×	-	-	A	×	かびによる病害。病原菌は被害残さどともに圃場に残って越冬し、春に胞子が飛散して伝染する。葉先枯れ病斑及び斑点病斑の上に胞子が多数形成され、伝染を繰り返す。また、生育後期に胞子が中心葉に付着し、感染すると黄色斑紋病斑となる。黒斑病と病徴が類似しており、見取り調査で見分けることは困難である。
134	野菜 (ユリ科)	ネギ	23,040	1,421	2	べと病	△	20	×	発1,052ha 防-	4.6%	B	○	15~20℃で 降雨が続く場 合多発	○	卵胞子による 土壌伝染 ・分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	△	病原菌の耐性リス ク	○	関係機関52位	野菜生産出 荷安定法	A	○	初めに葉・花梗に紡錓形の黄白色・大型病斑を形成し、灰白色の薄いカビを生じる。その後カビは暗褐色になる。病勢が進むと葉枯れを生じ枯死する。被害植物とともに菌糸、卵胞子で越冬する。春季及び秋季に比較的冷涼(15~20℃)で曇雨天が続く場合に多発しやすい。ため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
135	野菜 (ユリ科)	らっきょう	2,489	52	1	ロビンネダニ	×	1	×	発40ha 防-	1.6%	C	○	高温・多湿で 急速に増殖	×	歩行	B	×	1	3	3	○	・薬剤抵抗性フェ ーズII(DMTF剤) ・抵抗性がある薬剤 多数(22種)	×	-	-	B	×	幼・成虫が根部に寄生して加害するため、地上部の生育が抑制され、寄生密度が高くなると枯死することがある。また、フザリウム菌と密接な関係にあり、病害の発生助長要因になる。一度発生すると作物がなくてもヒポブス(第2若虫)の形で土壌中に長期生存する。酸性土壌で増殖が多いと言われている。年間十数世代を経過する。らっきょうでの発生は多くない。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント				
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等			関係機 関・農業 者の注 目度	アンケート 結果	I国の施 策の重 要性	評価3
136	野菜 (ユリ科)	らっきょう	2,489	52	2	さび病	×	1	×	発1ha 防-	0.04%	C	○	低温・多湿で 急速に増殖	○	夏胞子の風 による飛散	A	×	1	3	3	×	-	×	-	B	×	葉、花柄に発生する。赤褐色の筋縫形～楕円形の膨らんだ斑点(夏胞子層)を生じ、その後表皮が縦に破れて赤褐色の粉(夏胞子)が模出、飛散する。夏胞子層と混交して円形～筋縫形、黒色の斑点(冬胞子層)を生ずる。春季と秋季の2回発生する。気温が15～20℃のとき夏胞子による空気伝染で感染、約10日間の潜伏期間を経て発病し、これがくり返されてまん延する。生葉、枯死葉などで夏胞子層や組織内菌糸で越冬し、秋季にはこれらが伝染源となる。枯死葉中の菌糸、冬胞子層で越冬する。らっきょうでの発生は多くない。	
137	野菜 (ユリ科)	らっきょう	2,489	52	2	白色疫病	×	1	×	発0ha 防-	0%	C	○	冷涼多雨、気 温の日較差 が大きいと多 発	△	遊走子の雨 滴による伝染	A	×	1	2	2	×	-	×	-	B	×	葉の先端から灰白色になり、雨の多いときは暗褐色～灰褐色水浸病に変化し、乾燥するとこり状となる。葉先から次第に基部に進行し、汚白色となって下垂、腐敗する。りん茎は、暗色、水浸状のあめ色となる。病原菌は罹病植物とともに土壌中で越冬、伝染する。植付時期が遅いほど多発し、石灰の施用も発病を助長する。らっきょうでの発生は多くない。	
138	果樹	イチジク	1,069	68	1	アザミウマ類	×	1	×	発10.75ha 防55ha	1.0% 5.1%	C	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	×	1	3	3	×	-	×	-	B	×	ヒラズハナアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ハナアザミウマ等が発生する。幼・成虫が吸汁加害し、外観的に異常はないが、被害果を割ると内部が黄褐色から黒褐色に変色し、死虫に灰白色のかびが生じるので品質の低下が著しい。年間10世代前後繰り返し発生し、成虫で越冬する。イチジクでの発生は多くない。	
139	果樹	ウメ	17,700	212	1	カイガラムシ類	×	7	○	発2,030ha 防5,860ha	11.5% 33.1%	B	○	高温で急速に 増殖	○	・風による飛 行 ・苗木等への 付着	A	△	3	3	9	×	-	×	-	B	×	ウメノカイガラムシ等が発生する。幼虫と雌成虫が枝、幹に寄生し、しばしば群生する。多発すると枝や幹の表面を介殼で真っ白におおいつくすこともあり、生育を阻害し、激しいときには枯死させる。広食性である。年2～3世代発生し、成虫で越冬する。	
140	果樹	ウメ	17,700	212	2	かいはよう病	×	9	○	発3,647ha 防23,610ha	21% 133.4%	B	○	低温(12～ 15℃)・多雨 で多発	△	細菌の雨滴 による伝染	A	△	3	3	9	×	-	×	-	B	×	葉、枝、果実に発生する。葉や新梢では小斑を生じ、褐色になり、裂けたり、せん孔したりする。秋以降の当年枝では落葉痕付近や節間部に円形病斑が現れて越冬し、翌春に裂けたりしてかいはよう病となる。これは越冬伝染源としての役割が大きい。果実では落花直後の幼果が感染すれば水浸状のまま縮んで落果し、大豆粒大以降の幼果が感染すれば、褐色の小斑点を形成する。越冬枝上のスプリングカンカーから放出される病原細菌が雨媒伝染によって自然開口部あるいは傷口から侵入して伝染する。平均気温12～15℃、風雨条件下で激しい果実感染が起きる。	
141	果樹	ウメ	17,700	212	2	黒星病	×	9	○	発1,224ha 防23,742ha	6.9% 134.1%	B	○	春先に高温・ 多雨で多発	△	分生胞子の 雨滴による伝 染	A	△	3	3	9	×	-	×	-	B	×	果実、葉、枝に発生する。果実では径1.5cmほどに生育した頃、果梗近くに暗緑色の円い斑点が現れる。一般に淡黒色、2～3mm大のすずかび状の病斑になる。葉では楕円形、すずかび状の病斑が多い。新梢では楕円形、褐色のやや膨らんだ病斑を生じる。枝病斑内で越冬した病原菌が4月になって病斑上に分生子を新生し、これによって雨媒伝染する。	
142	果樹	おうとう	4,862	393	1	オウトウショウ ジョウバエ	×	2	×	発27ha 防-	0.6% -	C	△	高温で増殖	△	短距離飛翔	B	○	4	3	12	×	-	×	-	A	×	おうとうへの産卵は、果実の着色が始まってからに限られ、特に熟果に多く、肥大中の幼果には全く認められない。幼虫は果実を食害し、被害部は数日のうちに明らかに変色する。熟果の収穫が遅れると、被害が増加する。年間に多くの世代を繰り返し発生し、越冬は、成虫で行われる。おうとうでの発生は多くない。	
143	果樹	おうとう	4,862	393	1	ハダニ類	×	5	○	発1,398ha 防8,560ha	28.8% 176.1%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 ののって拡散 ・管理作業 者に着して拡 散	A	○	4	3	12	○	△	農業者12位	-	A	○	リンゴハダニ、オウトウハダニ、ナミハダニ等が発生する。ナミハダニは年間10世代前後を繰り返す。枝や幹の隙間、下草で越冬する。幼・成虫が葉の裏面に寄生して吸汁加害する。被害は、かすり状に黄ばんで葉縁が褐変萎縮し、開花遅延や新梢の伸長が抑制される。果実の肥大や着色が阻害されるため、実害が大きく、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
144	果樹	おうとう	4,862	393	2	灰星病	×	4	○	発129ha 防21,052ha	2.7% 433%	B	○	開花期の降 雨で多発	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	4	3	12	△	△	農業者9位	-	A	○	おもに花、果実を侵し、ときには葉・枝をも侵すことがある。花腐れは、花器全体が淡褐色に枯れ、灰褐色粉状の分生胞子を形成する。幼果は黒褐色の微細斑点が茶褐色に拡大し腐敗する。晴天が続くと、斑点がカサブタになる。熟果では、初期小さな褐色斑点がたちまち果実全体に拡がり軟腐する。越冬伝染源は、地表面で越冬した菌核と、樹上の越冬ミイラ果である。花腐れ上にできた分生胞子は果実への二次伝染源になる。発病には高湿度が適し、開花期および成熟期の降雨が発生量に大きく影響するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
145	果樹	カキ	22,940	420	1	アザミウマ類	△	23	○	発3,543ha 防22,733ha	15.4% 99.1%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	△	4	2	8	○	×	-	-	A	○	チャノキイロアザミウマ等が発生する。越冬成虫が3月中旬～4月下旬に発生し、11月中旬までに7世代前後を繰り返す。成・幼虫が開花期から幼果期に子房と花弁又はがくの隙間に侵入し、果皮を食害する。この食痕が果実の肥大にもなってコルク化した波状斑として拡大し、商品価値を損ねるなど大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
146	果樹	カキ	22,940	420	1	カイガラムシ類	△	22	○	発12,751ha 防41,215ha	55.6% 179.7%	A	○	高温で急速に 増殖	△	・風による飛 散 ・苗木等への 付着	A	○	4	3	12	×	-	×	-	A	○	フジコナカイガラムシ、オオワタコナカイガラムシ、ツノロウムシ等が発生する。幼虫と雌成虫が新芽、花蕾、花梗、果実、葉の表面や葉柄など地上部のあらゆる部分に寄生して吸汁加害する。大量の甘露を排泄し、すす病を誘発するなど、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
147	果樹	カキ	22,940	420	1	カキノヘタムシガ	△	24	○	発2,482ha 防24,730ha	10.8% 107.8%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	×	-	×	-	A	○	年2回発生し、越冬は樹皮の割れ目や粗皮の下の腐の中で、老熟幼虫で行い、翌春4月下旬～5月中旬に蛹化する。果梗とへたの隙間からおもに食入し、糞を排出しながら果実中心部を食害して大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
148	果樹	カキ	22,940	420	1	果樹カメムシ類	△	25	○	発6,175ha 防35,424ha	26.9% 154.4%	A	△	スギ・ヒノキの 落葉量が少 ないと多く飛 来	○	長距離飛翔	A	○	4	3	12	×	-	○	農業者20位 関係機関5位	-	A	○	ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ、アオカメムシ、チャバネアオカメムシ等が発生する。年1～2世代発生し、建物の隙間や落葉・わらの下で越冬する。4月ごろから各種植物の新梢や花などを移り渡る。成虫が果実を吸汁加害し、果肉が海綿状に変質して、肥大しなくなる。果実の表面に凹みが生じ、奇形果となるなど、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
149	果樹	カキ	22,940	420	1	ハダニ類	×	10	×	発51ha 防-	0.2% -	C	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 ののって拡散 ・管理作業 者に着して拡 散	A	×	4	1	4	○	△	農業者6位	-	B	×	ミカンハダニ、カンザワハダニ、ナミハダニ等が発生する。幼・成虫が葉の裏面に寄生して吸汁加害し、白いカスリ状となる。多発すると落葉して樹の生育を阻害する。果実が加害された場合には、着色期では本来の鮮やかな橙色とならず、黄色で光沢のない果実となり商品価値がなくなり、大きな被害を及ぼす。ミカンハダニは年間13世代前後を繰り返す。枝や幹の隙間、下草で越冬する。カキでの発生は多くない。	

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)										総合 評価	評価コメント			
						7 分布	発生報告 都道府県 数	イ 発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7 気象条件 による増殖	生態	イ 拡散性	生態	評価2	7 加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ 防除の 困難性	課題等	ウ 関係機 関・農業 者の注 目度	アンケート 結果	工 国の施策 上の重要 性			評価3		
150	果樹	カキ	22,940	420	1	ハマキムシ類	×	17	○	発3,499ha 防1,950ha	15.3% 8.5%	B	○	高温で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	4	2	8	○	・薬剤抵抗性フェーズII(CYAP,ダイアシン等)	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	A	○	チャノコカクモンハマキ、チャハマキ等が発生する。いずれも幼虫態で越冬し、チャノコカクモンハマキは年間4~5回、チャハマキは3~4回発生する。成葉を重ねて綴り合わせる。果実が葉が接する面のほか、へたに沿って浅く食害することが多い。被害果は食痕がコルク化して傷果を生じるだけでなく、炭疽病菌の侵入を招くこともあり、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
151	果樹	カキ	22,940	420	2	炭疽病	△	24	○	発3,167ha 防29,221ha	13.8% 127.4%	A	○	降雨が継続と多発	△	分生胞子の雨滴による伝播	A	○	4	3	12	×	-	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	A	○	枝梢、果実、まれに葉を侵す。枝梢では黒色の円形斑点を生じ、やや凹陥し、縦に亀裂を生ずる。果実では黒色小斑点を生じ、しだいに拡大して少くばんだ病斑となる。病斑面には降雨後などに鮭肉色の粘質物を生ずる。雨水の飛沫とともに飛散して、新梢、果実に達し、角皮から侵入して発病する。病斑上に分生子を形成し、これが飛散して伝染をくり返す。果実に大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
152	果樹	カンキツ	76,120	1,753	1	アブラムシ類	△	21	○	発23,199ha 防38,983ha	30.5% 51.2%	A	○	高温・乾燥で増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズII(ネオニコチノイド等) ・抵抗性がある薬剤多数(42種:ワタアブラムシ) ・ウイルス病(トリスチザウイルス)を媒介	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	A	○	ミカンクワアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ、ワタアブラムシ等が発生する。新梢や幼果に群がって吸汁加害する。多発した場合は、新葉での巻縮症状や幼果での落果被害が生じる。また、排泄物がすす病も引き起こすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
153	果樹	カンキツ	76,120	1,753	1	果樹カメムシ類	△	23	○	発10,191ha 防17,314ha	13.4% 22.8%	A	△	スギ・ヒノキの球果量が少なく多く飛来	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	×	-	○	農業者20位 関係機関5位	果樹農業振興特別措置法	A	○	ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ミノミトゲヘリカメムシ等が発生する。果実への加害時期は、通常9月中旬に早生温州が少し黄色味を帯びた頃からであるが、年によっては8月中旬となる。気温が高い時期の加害では、果実はまだらに早期着色し、やがて落果する。10月中旬以降は、落果しないが、剥皮すると加害部の皮と果肉がくっついたり、果肉がスポンジ状になるなど、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
154	果樹	カンキツ	76,120	1,753	1	ハダニ類	△	25	○	発46,233ha 防213,636ha	60.7% 280.7%	A	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	糸を吐き、風に乗って拡散 ・管理作業者に付着して拡散	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズII(シエビラフェン、シラトフェン等) ・抵抗性がある薬剤多数(27種:ミカンハダニ)	○	農業者64位 関係機関4位	果樹農業振興特別措置法	A	○	ミカンハダニ、カンザワハダニ等が発生する。ミカンハダニは年間13世代前後を繰り返す。枝や幹の隙間、下草で越冬する。幼・成虫が葉の裏面に寄生して吸汁加害し、白いカスリ状となる。多発すると落葉して樹の生育を阻害する。果実が加害された場合には、着色期では本来の鮮やかな橙色とならず、黄色で光沢のない果実となり商品価値がなくなり、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
155	果樹	カンキツ	76,120	1,753	1	ハマキムシ類	×	8	×	発508ha 防-	0.7% -	C	○	高温で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	5	1	5	○	・薬剤抵抗性フェーズII(CYAP,ダイアシン等)	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	A	×	チャノコカクモンハマキ、チャハマキ等が発生する。越冬幼虫が4~5月に羽化し、年4~5世代繰り返す。幼虫が新葉を巻き、重ね合わせて綴る。幼果では幹の下にもぐって表面を食し、輪状の傷跡を残す。被害幼果の多くは落果し、樹上に残った果実は食害痕がコルク化して傷果となる。カンキツでの発生は多くない。
156	果樹	カンキツ	76,120	1,753	2	かいよう病	△	24	○	発15,814ha 防47,288ha	20.8% 62.1%	A	○	降雨が継続と多発	△	細菌の雨滴による伝播	A	○	5	3	15	×	-	△	関係機関79位	果樹農業振興特別措置法	A	○	葉、枝、果実に発生する。春葉の病斑は円形、淡黄色、水浸状の斑点で、表面が盛り上がり、中央部がコルク化する。夏、秋葉ではミカンハダニの食害や風ずれなどの傷口から細菌が侵入する。葉柄も侵されやすく、その場合は激しく落葉する。果実の病斑も葉と同様にコルク化する。秋期の比較的低温時に感染するとそのまま潜伏し、翌年3月に発病して潜伏越冬病斑(スプリングキャンカー)になり、病原細菌のいつ出量はさらに大きくなる。雨で分散し、風雨によって遠くまで飛散するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。	
157	果樹	カンキツ	76,120	1,753	2	黒点病	△	25	○	発49,153ha 防220,550ha	64.6% 289.7%	A	○	降雨が継続と多発	△	分生胞子の雨滴による伝播	A	○	5	3	15	×	-	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	A	○	葉、枝、果実に発生する。病斑は症状の違いによって黒点、環斑、泥塊状の3つに分けられ、黒点型は0.1~0.5mm、円形の黒点が散生するものである。病原菌は樹上の枯枝で越冬または地表の枯枝で子の殻で越冬する。分生子がおもな伝染源で、3月に降雨によって分散し、6~7月に最高となる。生育期の多雨、とくにしとしと雨が続き、果面の雨滴が乾きにくい条件下で多発するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
158	果樹	カンキツ	76,120	1,753	2	そうか病	△	25	○	発8,796ha 防61,956ha	11.6% 81.4%	A	○	低温・多湿・日照不足で多発	△	子の胞子の雨滴による飛散	A	○	5	2	10	×	-	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	A	○	葉、果実、枝に発生する。葉では円形の小さな斑点を生じる。病斑の表面は灰黄色~淡橙黄色を呈し、ときに赤みを帯びる。若い葉・果実が感染するといぼ型病斑となり、生長してから感染するとそうか型病斑となる。雨のみで分散し、4~6月と9月に多い。感染の適温は22~24℃。4~5月の多雨で病斑上に新たに胞子形成し、盛んに二次伝染するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
159	果樹	キウイフルーツ	2,366	96	1	果樹カメムシ類	×	4	×	発- 防-	-	C	△	スギ・ヒノキの球果量が少なく多く飛来	○	長距離飛翔	A	△	2	3	6	×	-	○	農業者20位 関係機関5位	果樹農業振興特別措置法	A	×	ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ等が発生する。成虫が果実を吸汁する。吸汁された果実は、その部分の果肉が海綿状に変質し、肥大しなくなる。そのため、果実の表面に凹みが生じ、奇形果となる。年1~2世代発生し、建物の隙間や落葉・わらの下で越冬する。4月ころから各種植物の新梢や花などを移り渡る。キウイフルーツでの発生は多くない。	
160	果樹	キウイフルーツ	2,366	96	2	かいよう病	×	13	△	発22ha 防962ha	0.9% 43.1%	B	○	10~20℃で急速に増殖	△	細菌の雨滴による伝播	A	△	2	3	6	×	-	○	※農業者、関係機関の注目度が極めて高い	果樹農業振興特別措置法	A	○	葉と花が褐変、萎縮したり落葉・落花したりする。葉では褐変部の周辺に淡黄色のハローを生ずる。枝幹では、細菌液が溢出し、樹皮に亀裂を生じ、褐変部の上部は萎縮、枯死する。激しく発病して枝幹が枯死しても台木は健全に残る。	
161	果樹	スモモ	3,160	71	1	アブラムシ類	×	1	×	発11ha 防-	0.4% -	C	○	高温・乾燥で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	×	2	2	4	○	・ウイルスを媒介する ・抵抗性がある薬剤多数(74種:モモアブラムシ)	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	B	×	モモアブラムシ、モモコキアブラムシ、カワリコブアブラムシ等が発生する。幼・成虫が新葉に寄生する。モモアブラムシとカワリコブアブラムシは、葉を縦に巻縮させ、虫こぶをつくる。芽の付近に産み付けられた卵で越冬する。新芽がふくらみ始める頃にふ化し、まず新芽やつぼみに寄生する。その後新葉が展開するとともに葉に移動して寄生するが、古い硬い葉では寄生できないので次々に新葉に移動して被害をひろげる。5月下旬から中間寄主(モモアブラムシ)ではアブラナ科、ナス科などの1年生作物、カワリコブアブラムシではセンニチコウ、ボタンヅルなどに移動し、10~11月頃に戻って1世代経過した後産卵し、冬を迎える。ウイルス病を媒介する。スモモでの発生は多くない。
162	果樹	スモモ	3,160	71	1	カイガラムシ類	×	2	×	発17ha 防-	0.5% -	C	○	高温で急速に増殖	△	・風による飛散 ・苗木等への付着	A	△	2	3	6	×	-	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	B	×	ウメシロカイガラムシ等が発生する。幼虫と成虫が枝、幹に寄生し、しばしば発生する。多発すると枝や幹の表面を介して真白におおいつくこともあり、生育を阻害し、激しいときは枯死させる。広食性である。年2~3世代発生し、成虫で越冬する。スモモでの発生は多くない。
163	果樹	スモモ	3,160	71	1	シンクイムシ類	×	3	×	発10ha 防-	0.3% -	C	○	高温で急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	2	3	6	×	-	×	-	○	果樹農業振興特別措置法	B	×	スモモヒメシンクイ等が発生する。スモモの開花約1ヶ月後に羽化し、果面に点々と産卵する。幼虫はただちに果内に食い入り、蛇行状の食痕が透けて見えることがある。8月中下旬に老熟した幼虫は、果面に脱出孔を開けて脱果し、地表下に土粒を綴った繭をつつて休眠に入る。年3~4世代発生する。スモモでの発生は多くない。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)				評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント					
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性			課題等	関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	I国の施策 上の重要 性	評価3
164	果樹	ナシ	14,120	850	1	アブラムシ類	○	35	○	発6,191ha 防32,062ha	43.9% 227.1%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(シナフラン、クロチアニジン、イミダクロリド) ・抵抗性がある薬剤多数(42種:ワタアブラムシ)	×	-	果樹農業振興特別措置法	A	○	ワタアブラムシ、ナシノアブラムシ、ナシコフキアブラムシ、ナシマルアブラムシ等が発生する。新葉に寄生して吸汁加害し、新梢や果実の被害を阻害するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
165	果樹	ナシ	14,120	850	1	果樹カメムシ類	○	39	○	発1,863ha 防24,644ha	14.1% 186.7%	A	△	スギ・ヒノキの 球果量が少 ないと多く飛 来	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	×	-	○	農業者7位 関係機関5位	果樹農業振興特別措置法	A	○	クサギカメムシ、アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシ、チャバネアオカメムシ、ナンカメムシ等が発生する。成虫が果実を吸汁する。吸汁された果実は、その部分の果肉が海綿状に変質し、肥大しなくなる。果実の表面に凹みが生じ、奇形果となるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。年1~2世代発生し、建物の隙間や落葉・わらの下で越冬する。5月ころから各種植物の新梢や花などを移り渡る。
166	果樹	ナシ	14,120	850	1	シンクイムシ類	○	34	○	発1,551ha 防87,405ha	11% 619%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	×	-	△	関係機関27位	果樹農業振興特別措置法	A	○	ナシヒメシンクイ等が発生する。主に果実に、まれに新梢に被害を与える。被害部はやがて腐敗、変色し、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。成虫は日没15~2時間後と日の出前に活動が盛んであり、交尾は明け方に行う。年間発生回数は、北海道で2~3世代、東北で3~4回、関東、中部地方で4~5回、関西地方以西では5~6回とされている。老熟幼虫で、核殻の粗皮の割れ目や取り残しの袋の中等に菌を作って越冬する。
167	果樹	ナシ	14,120	850	1	ハダニ類	○	38	○	発5,784ha 防37,333ha	41% 264.4%	A	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 によって拡散 ・管理作業者 に付着して拡 散	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(クワロフェナピル、ヘキシチアノクス、アセキソニル等) ・抵抗性がある薬剤多数(92種:ナミハダニ)	○	農業者20位 関係機関37位	果樹農業振興特別措置法	A	○	ナミハダニ、アウトハダニ、クワオオハダニ等が発生する。ナミハダニは年間10世代前後を繰り返す。枝や幹の隙間、下草で越冬する。幼・成虫が葉の裏面に寄生して吸汁加害する。被害葉は、かすり状に黄ばんで葉縁が褐変萎縮し、開花遅延や新梢の伸長が抑制される。果実の肥大や着色が阻害されるため、実害が大きく、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
168	果樹	ナシ	14,120	850	1	ハマキムシ類	△	29	○	発820ha 防29,269ha	5.8% 207.3%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(CYAP、ダイアジノン等)	×	-	果樹農業振興特別措置法	A	○	チャノコカクモンハマキ、リンゴカクモンハマキ、ミダレカクモンハマキ等が発生する。年間4~5世代を繰り返し、4~10月の間は幼・成虫ともに発生する。粗皮下や枝に付着した葉片下で越冬する。葉を巻いたりつづり合わせたりするだけでなく、果皮も食害して「ナマリ果」とし、商品価値を著しく低下させるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
169	果樹	ナシ	14,120	850	2	黒星病	○	38	○	発5,030ha 防115,025ha	35.6% 814.6%	A	○	5~6月の低 温と多雨で多 発	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(フェナリモン、ヘキサソナゾール等)	○	農業者5位 関係機関6位	果樹農業振興特別措置法	A	○	葉、果実、新梢に発生する。初めりん片の脱落した芽基部に黒色すず状の病斑を生じ、しだいに葉柄、中肋、果梗に縦長の同様の病斑を形成する。葉身裏面では葉脈に沿ってべったりしたすすを生ずる。幼果では黒色の円形病斑を生じて、のちにかさぶた状となって、裂果や落果の原因となる。本病の一次伝染源は芽基部の病斑部にすず状に形成される分生子と、罹病落葉から飛散する子の胞子である。病斑上に形成された分生子は、約15日の潜伏期間を要して、つぎつぎと二次伝染するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
170	果樹	ナシ	14,120	850	2	黒斑病	△	26	○	発1,157ha 防36,975ha	8.2% 261.9%	A	○	高温・多湿で 多発	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	×	-	△	農業者35位	果樹農業振興特別措置法	A	○	葉、果実、枝に発生し、ときに花弁も侵す。未成熟葉では小さな黒色斑点を生じ、しだいに拡大し、部分的に生育が阻害されるためゆがんで波打った状態となる。幼果では病斑部に亀裂を生じ、やがて落果する。成熟果では同心輪紋状の軟腐病斑を形成する。枝では徒長枝に黒褐色病斑を生じ、亀裂を生ずることが多い。二十世紀は特異的に弱い。枝病斑や枯死した頂芽の組織内で菌糸で越冬し、翌年これらの部分に分生子を形成して伝染する。新葉あるいは幼果の病斑上には分生子が形成され続け、風で飛散して広く伝染するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
171	果樹	びわ	1,640	-	1	果樹カメムシ類	×	1	△	発136ha 防-	8.5% -	B	△	スギ・ヒノキの 球果量が少 ないと多く飛 来	○	長距離飛翔	A	△	2	3	6	×	-	○	農業者20位 関係機関5位	果樹農業振興特別措置法	A	○	クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシが発生する。成虫が果実を吸汁する。4月~6月にびわ園で発生し、スギやヒノキ林に移動する。成虫が果実を吸汁加害し、果肉が海綿状に変質して、肥大しなくなる。果実の表面に凹みが生じ、奇形果となるなど、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
172	果樹	ブドウ	18,860	1,073	1	ハマキムシ類	×	15	×	発255ha 防2,018ha	1.4% 10.7%	C	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(CYAP、ダイアジノン等)	×	-	果樹農業振興特別措置法	A	×	チャノコカクモンハマキ、ホソバチビヒメハマキ、ブドウソハマキ等が発生する。葉、蕾、花、果実を織り合わせて食害する。加害された果粒は萎縮して脱落しやすく、腐敗するものがある。チャノコカクモンハマキは年4~5世代、ホソバチビヒメハマキとブドウソハマキは年2世代程度繰り返す。ブドウでの発生は多くない。
173	果樹	ブドウ	18,860	1,073	2	晩腐病	△	25	○	発1,512ha 防39,301ha	8.0% 208.4%	A	○	多雨・多湿で 多発	△	分生胞子の 雨滴による伝 播	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(MBC等)	△	関係機関71位	果樹農業振興特別措置法	A	○	成熟間際の果実では淡褐色の小点でしだいに全面に及ぶ。熟果では赤褐色、円形でやや不明瞭な病斑を生じて腐敗する。果面はさめ肌状になって小黒点を生じ、その上に髄肉色、粘質の胞子塊を形成する。雨で分散する。未熟果では着色間際の減酸期まで潜伏するが、熟果では4~5日の潜伏期間のち発病する。多雨・多湿で多発し、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
174	果樹	ブドウ	18,860	1,073	2	灰色かび病	△	24	○	発669ha 防30,603ha	3.6% 162.3%	A	○	多雨・多湿で 多発	○	分生胞子の 風による伝播	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(MBC等) ・病原菌の耐性リスク高	×	-	果樹農業振興特別措置法	A	○	開花前の花穂および成熟期の果実に発生が多く、前者では穂軸や果梗の一部が淡褐色、のち黒褐色になって腐敗して花流れを起し、灰色のかびを生ずる。後者では褐色になって腐敗し、1、2日後には灰色のかびを生ずる。葉では大型の病斑を形成し、表面に灰色のかびを生ずる。被害部上で菌糸または菌核で越冬する。菌糸上に形成された分生子や、腐生的に繁殖した分生子が風で分散して花穂に侵入し、発病させて病斑上に分生子を形成するが、一部はそのまま潜伏し、熟果を発病させる。多雨・多湿で多発し、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
175	果樹	ブドウ	18,860	1,073	2	べと病	△	29	○	発5,062ha 防29,286ha	26.8% 155.3%	A	○	低温を伴う連 続降雨で多 発	△	遊走子の雨 滴による伝播	A	○	5	3	15	○	・薬剤抵抗性フェーズⅢ(Oa等) ・病原菌の耐性リスク高	○	農業者12位 関係機関24位	果樹農業振興特別措置法	A	○	葉では初め淡黄色~淡緑色、不整形の斑点が出現し、のちに褐色に変わる。裏面に純白色のかびを密生する。新梢、巻ひげ、幼果などにも初め水浸状で光沢があり、のち黄緑色から褐色に変わる病斑を形成し、その上に純白のかびを生ずる。果実は硬化する。被害葉組織内で胞子が越冬するが、胞子は3ヶ月ぐらいたんぱると発芽可能となる。6~7月頃被害葉が腐ると発芽して分生子を生じ、分生子を形成する。これは風で飛散して葉に達したり、雨水とともに地表に落ちて発芽し、遊走子を形成して第一次伝染源となるなど、広まん延するおそれがあるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害虫 区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)				評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)										総合 評価	評価コメント		
							7分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	7気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	7加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等	ウ関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果			工国の施策 上の重要 性	評価3
176	果樹	マンゴー	431	76	1	アザミウマ類	×	1	○	発220ha 防-	51% -	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	×	1	2	2	○	薬剤抵抗性フェ ーズⅡ(アザミウマ 、チャアミキサム 等)	×	-	-	B	×	チャノキイロアザミウマ等が発生する。幼・成虫が新葉と果実を吸汁 加害し、褐色の大きな傷をつくる。年間7世代前後を繰り返す。越冬 は成虫で行うが、暖地では幼虫、蛹でも可能である。広食性で100種 を超える寄主植物が知られる。
177	果樹	モモ	10,820	477	1	果樹カメムシ類	×	16	○	発977ha 防5,548ha	9% 51.3%	B	△	スギ・ヒノキの 球果量が少 ないとき多く飛 来	○	長距離飛翔	A	○	4	3	12	×	-	○	農業者20位 関係機関5位	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ等が発生する。成虫が果実を 吸汁する。年1~2世代発生し、建物の隙間や落葉、わらの下で越冬 する。4月ごろから各種植物の新梢や花などを移り渡る。成虫が果実 を吸汁加害し、果肉が海綿状に変質して、肥大しなくなる。果実の表 面に凹みが生じ、奇形果となるなど、大きな被害を及ぼすため、国の 発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
178	果樹	モモ	10,820	477	1	シンクイムシ類	×	16	○	発1,565ha 防22,120ha	14.5% 204.4%	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	×	-	×	-	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	ナシヒメシンクイ等が発生する。幼虫は未展開の若葉の葉柄基部から 梢頭に食い込み、芯を空洞にしながらい込み、木部に達すると 別の新梢に移る。被害部から先は萎凋して下垂し、芯折れ状態とな るが、やがて枯死して変色する。果実が肥大すると食入が始まる。 北海道・東北では2~3世代、東海では4~5世代、九州では6世代前 後繰り返す。輸出検査上も重要な害虫であり、国の発生予察の対象 として、適切に防除を行う必要がある。
179	果樹	モモ	10,820	477	1	ハダニ類	×	14	○	発5,190ha 防13,833ha	48% 127.9%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 によって拡散 ・管理作業に 付着して拡 散	A	△	4	2	8	○	抵抗性がある薬剤 多数(92種:ナミハダ ニ、27種:ミカンハダ ニ)	△	農業者6位	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ等が発生する。ナミハダニ は年間10世代前後を繰り返す。枝や幹の隙間、下草で越冬する。 幼・成虫が葉の表裏に寄生して吸汁加害する。被害葉は、かすり状 に黄ばんで葉縁が褐変萎縮し、開花遅延や新梢の伸長が抑制される 。果実の肥大や着色が阻害されるため、実害が大きく、国の発生 予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
180	果樹	モモ	10,820	477	1	ハマキムシ類	×	10	×	発106ha 防-	1% -	C	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	○	薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(CYAP、ダイアジ ン等)	×	-	果樹農業振 興特別措置 法	A	×	リンゴゴカクモンハマキ等が発生する。幼虫は春に新芽を綴り、夏に は葉を巻いて食害する。雌成虫は羽化翌日から毎日1卵塊を葉の下 面に産む。粗皮下や枝を綴りつけた葉片の下で白い繭をつくって脱 皮し、越冬する。年3世代繰り返す。モモでの被害は多くない。
181	果樹	モモ	10,820	477	2	せん孔細菌病	×	16	○	発3,024ha 防43,841ha	28% 405.2%	B	○	低温・多雨で 多発	△	細菌の雨滴 による伝播	A	○	4	3	12	×	-	○	農業者20位 関係機関4位 ※農業者・関係 機関の注目が極 めて高い	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	葉、果実、枝に発生する。葉では黄色から黒褐色へと徐々に濃い色 調のえ死斑となる。病斑周辺に黄色の中毒斑を生じ、健全部との境 界に離層が発達し、せん孔する。果実では水浸状の小斑点が現れ、 星形の亀裂を生ずる。枝は2つの症状があり、1つは新梢に水浸状の 病斑を生じる。もう1つは当年生育枝の落葉痕や皮目から病原細菌 が侵入して潜伏状態で越冬し、翌春樹液の流動とともに水浸状病斑 を現す。第一次伝染源は枝の潜伏越冬病斑である。ここから溢出さ れた病原細菌は雨で伝播して若葉の気孔、果実や枝の皮目から侵 入して拡散するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行 う必要がある。
182	果樹	リンゴ	40,120	1,375	1	果樹カメムシ類	×	13	△	発3,118ha 防-	7.8% -	B	△	スギ・ヒノキの 球果量が少 ないとき多く飛 来	○	長距離飛翔	A	○	5	3	15	×	-	○	農業者20位 関係機関5位	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ等が発生する。成虫が果実を 吸汁する。吸汁された果実は、その部分の果肉が海綿状に変質し、 肥大しなくなる。果実の表面に凹みが生じ、奇形果となるため、国の 発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。年1~2世代 発生し、建物の隙間や落葉、わらの下で越冬する。4月頃から各種植 物の新梢や花などを移り渡る。
183	果樹	リンゴ	40,120	1,375	1	シンクイムシ類	×	15	○	発1,650ha 防286,467ha	4.1% 714.0%	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	×	-	△	農業者12位	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	リンゴヒメシンクイ等が発生する。年1回発生し、成虫は7月に羽化 し、果面に点々と産卵する。幼虫はただちに果内に食い込み、おもに 表層部を食するため、蛇行状の食痕が透ける。8月中旬~9月 下旬に老熟した幼虫は果実を脱し、樹上の割れ目や粗皮下に繭を つくって越冬し、翌年初夏に蛹化する。輸出検査上も注意を要する害 虫であり、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
184	果樹	リンゴ	40,120	1,375	1	ハダニ類	×	15	○	発10,061ha 防126,123ha	25.1% 314.4%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 によって拡散 ・管理作業に 付着して拡 散	A	○	5	3	15	○	薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(クロルフェニ ル、エキサゾル ル、ヘキサチアソク ス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(92種:ナミハダ ニ、46種:リンゴハダ ニ)	○	農業者4位 関係機関37位	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	ニセクロバーハダニ、リンゴハダニ、ナミハダニ、オウトウハダニ等が 発生する。ナミハダニは年間10世代前後、他種は年間5世代前後を 繰り返す。枝や幹の隙間、下草で越冬し、樹上に移動する。幼・成虫 が、主に葉裏に寄生して吸汁加害する。被害葉は、かすり状に黄ば んで葉縁が褐変萎縮し、開花遅延や新梢の伸長が抑制される。果実 の肥大や着色が阻害されるため、実害が大きく、国の発生予察の対 象として、適切に防除を行う必要がある。
185	果樹	リンゴ	40,120	1,375	1	ハマキムシ類	×	15	○	発1,618ha 防158,075ha	4.0% 394.0%	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(CYAP、ダイアジ ン等)	×	-	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	リンゴゴカクモンハマキ、リンゴモンハマキ、ミダレカクモンハマキ等 が発生する。年間4~5世代を繰り返す。4~10月の間は幼・成虫とも に発生する。粗皮下や枝に付着した葉片下で越冬する。葉を巻いた りつづら合わせたりするだけでなく、果皮も食害して「ナメ果」とし、 商品価値を著しく低下させるため、国の発生予察の対象として、適切 に防除を行う必要がある。
186	果樹	リンゴ	40,120	1,375	2	黒星病	×	14	○	発3,208ha 防245,814ha	8.0% 612.0%	B	○	春季及び秋 季の低温・多 雨で多発	△	分生胞子の 雨滴による伝 播	A	○	5	3	15	○	病原菌の耐性リス ク高	△	農業者29位	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	葉、新梢、果実に発生する。葉では、すす状の黒緑色の病斑を生じ、 激しいときは落葉する。果実では、幼果期から発生し、暗褐色のかさ ぶた状の病斑を生じ、秋に梨果変形果となる。果実肥大後期に感染 した場合は、収穫期までに発病せず、貯蔵中に発病する。主に春季 及び秋季に発生するが、冷夏の年には、春から秋まで発生が続く。リ ンゴの主要病害の一つであり、国の発生予察の対象として、適切に 防除を行う必要がある。
187	果樹	リンゴ	40,120	1,375	2	斑点落葉病	×	16	○	発7,121ha 防298,806ha	17.8% 744.9%	B	○	高温・多湿で 多発	○	分生胞子の 風による飛散	A	○	5	3	15	○	薬剤抵抗性フェ ーズⅢ(イプロソフ、ポ リオキサン等)	△	農業者8位	果樹農業振 興特別措置 法	A	○	葉、果実および枝に病斑をつくる。葉では、はじめ褐色の小さい斑点 が現れる。発病に適した条件が続けば、病斑は拡大し、輪紋状ある いは不規則な大型病斑となり、激しい場合は黄変して落葉する。成 果に感染すると果点を中心に褐色斑点が現れ、拡大して円形の病 斑となり、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適 切に防除を行う必要がある。
188	工芸農作物	さとうきび	22,740	262	1	カンシャコバナネ ガカメムシ	×	3	○	発19,112ha 防21,917ha	84.1% 96.4%	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	×	-	×	-	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	○	成虫には長翅と短翅の2型がある。年2~3世代を繰り返す。幼・成虫 が集団で芯葉部や葉鞘内から吸汁加害し、サトウキビの生育を阻害 する。被害を受けると葉は黄変し、吸汁痕は赤褐色の斑紋を生じて やがて褐変し、茎は伸長や肥大が抑制されるため、国の発生予察の 対象として、適切に防除を行う必要がある。
189	工芸農作物	さとうきび	22,740	262	1	メイチュウ類	×	2	○	発16,944ha 防36,746ha	74.5% 161.6%	B	○	高温で急速に 増殖 ・台風後に多 発	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	×	-	△	関係機関42位	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	○	ふ化幼虫は集団で葉鞘内側を食害し、2~3齢になると分散して、1茎 に1頭ずつ食入する。生育初期の分けつ茎と生育後期の成茎での被 害が多く、とくに秋に大発生すると、収穫茎がよじれた風で折損す るため、被害は大きくなる。また、傷口から侵入した赤腐菌にサトウ キビが感染し、糖が分解され、糖度の低下を引き起こすなど、大きな 被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う 必要がある。

番号	作物区分	作物名	作付面積 (5年平均) (ha)	H25 農産物 算出額 (億円)	病害 虫区分	病害虫	評価1(国内の分布が局地的ではない)					評価2(急激にまん延する)					評価3(農作物に重大な損害を与える傾向がある)							総合 評価	評価コメント				
							ア分布	発生報告 都道府県 数	イ発生面積 ・被害面積	発生面積 防除面積 (5年平均)	発生面積率 防除面積率	評価1	ア気象条件 による増殖	生態	イ拡散性	生態	評価2	ア加害度	農作物 の重要 性	被害の 様式	被害度	イ防除の 困難性	課題等			ウ関係機 関・農業者 の注目度	アンケート 結果	エ国の施策 上の重要 性	評価3
190	工芸農作物	茶	46,320	970	1	チャトゴコナジラミ	×	5	△	発2,764ha 防-	6.0% -	B	○	非常に増殖 力が高い	△	短距離飛翔	A	△	4	2	8	×	-	△	関係機関79位	お茶の振興に 関する法律	B	×	成虫及び幼虫による葉の吸汁被害及び幼虫が排泄する甘露により、下葉にすす病が発生する。また、摘採期には、収穫作業者が吸引するなどして不快害虫としての一面も見られる。現在のところ、全国的に被害が発生している状況ではない。
191	工芸農作物	茶	46,320	970	1	チャノホソガ	×	17	○	発19,678ha 防65,041ha	42.5% 140.4%	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	2	10	×	-	×	-	お茶の振興に 関する法律	A	○	ふ化した幼虫は、卵の底面から直接葉の組織に侵入し、表皮下を曲線状に潜行して、葉縁を内側に折り曲げてその中で加害する。成長した幼虫は一枚の葉を三角形に巻いて、その中で葉先から加害する。葉巻の中には、黒色の糞を多量に蓄積する。多発した場合は、葉巻の中に蓄積された糞により品質が低下し、味及び香りが劣化して飲用にならなくなるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
192	工芸農作物	茶	46,320	970	1	ハダニ類	×	18	○	発23,547ha 防81,392ha	50.8% 175.7%	B	○	高温・乾燥で 急速に増殖	△	糸を吐き、風 にのって拡散 ・管理作業 者に着して拡 散	A	○	5	3	15	×	-	○	農業者9位 関係機関17位	お茶の振興に 関する法律	A	○	デビコバダニ、カンザワハダニ等が発生する。葉裏に寄生し、吸汁する。新葉や新芽に加害すると真化、褐変、巻葉、奇形葉を生じ、ときには落葉するなど大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
193	工芸農作物	茶	46,320	970	1	ハマキムシ類	×	18	○	発14,178ha 防23,486ha	30.6% 50.7%	B	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	5	3	15	○	薬剤抵抗性フェーズ Ⅲ(フルフェノックス ロシ、テブフェノジド 等)	△	関係機関37位	お茶の振興に 関する法律	A	○	チャノココカモンハマキ、チャハマキ等が発生する。チャノココカモンハマキの越冬幼虫は4月～5月に羽化し、年間4～5世代発生する。チャハマキの越冬世代は4月から羽化し、年間4世代発生する。幼虫が2～3枚の葉を綴り合わせて食害し、多発すると大きく減収するなど、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
194	工芸農作物	茶	46,320	970	2	炭疽病	×	18	○	発27,004ha 防77,680ha	58.3% 167.7%	B	○	高温・多雨で 多発	△	分生胞子の 雨滴による伝 播	A	○	5	3	15	×	-	×	-	お茶の振興に 関する法律	A	○	葉のみに発生。被侵入毛茸を中心として0.2～0.6mmの円形の濃緑色小斑が見られる。菌は通導組織を伝わって進展するため、被害葉には褐色の網目を生じ、やがて褐色した葉脈に囲まれた葉肉部分が壊れて、褐色の大型病斑が形成される。被害葉は大部分落葉する。分生胞子が雨水によって分散し、飛沫とともに飛散してまん延するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。越冬は、主として病葉で菌糸のかたちで行われ、翌春分生子を生じて伝染する。
195	工芸農作物	てんさい	61,020	361	1	ヨトウガ	×	1	○	発10,742ha 防-	17.6% -	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	4	3	12	×	-	×	-	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	○	葉裏に卵塊として産みつけられた卵からふ化した幼虫は、最初葉の裏に群生し、葉の表皮を残して食害するが、やがて葉に孔を開けるようになる。中齢以降は分散して昼間は地中に隠れ、夜間に活動するようになり中齢だけを残して暴食するなど大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
196	工芸農作物	てんさい	61,020	361	2	褐斑病	×	1	○	発28,151ha 防-	46.1% -	B	○	7～8月が高 温・多湿な場 合多発	○	分生胞子の 風による伝 播	A	○	4	3	12	△	薬剤抵抗性フェーズⅡ (DM等) 病原菌の耐性リス ク中	×	-	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	○	葉および葉柄に発生する。直径2～4mmの円形、褐色の病斑が複数現れ、しだいに葉全体に拡がり、最後には葉は枯死する。分生胞子の飛散によって伝染する。気温が20℃前後で胞子を形成し、風雨によって葉上に飛来する。7～8月が高湿・多湿な年に発生が多い。発病が激しい場合は9月に入って新葉が再生するため、収量、糖分が減少するなど、大きな被害を及ぼすため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
197	工芸農作物	てんさい	61,020	361	1	西部萎黄病	×	1	△	発(十勝地 方、網走地方 等) 防-	- -	B	○	保着したモモ アカアブラム シの発生量に よる	△	モモアカア ブラムシによ りウイルスが 伝染(経卵伝 染)	A	○	4	3	12	○	ウイルス病の登 録農薬はない ため、モモアカ アブラムシの防 除が重要	×	-	砂糖及びでん 粉の価格調 整に関する法 律	A	○	主にモモアカアブラムシが西部萎黄病ウイルスを永續伝播する。経卵伝染はしない。伝染源は確病しているホウレンソウ、ハクサイ、カブなどである。西部萎黄病の症状は、中位葉および下葉に扇形の黄化症状が現れ、しだいに株全体に広がり、やがて葉全体が黄化して凸凹して固く、もろくなる。本病は、てんさいの収量にも影響する。そのため、国の発生予察の対象として、適切に防除する必要がある。
198	花き	きく	5,262	654	1	アザミウマ類	△	27	○	発804.6ha 防9147.4ha	15.3% 173.8%	A	○	高温で急速に 増殖	△	短距離飛翔	A	○	4	3	12	○	薬剤抵抗性フェーズⅢ(アセチミプリ ド、メチンピラム、 クロチアニジン等) トマト黄化ウイルス (TSWV)媒介	△	関係機関46位	花きの振興に 関する法律	A	○	ヒラズハナアザミウマ、ミカンキウロアザミウマ、ミナキウロアザミウマ等が発生する。成虫が新芽を加害し、展開葉がケロイド状に萎縮、奇形になる。花を加害した場合、花色が退色する。ウイルス病も媒介する。花や葉への加害により著しく商品価値が低下するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
199	花き	きく	5,262	654	1	アブラムシ類	△	27	○	発623.6ha 防6,460.6ha	11.9% 122.8%	A	○	15～20℃で 急速に増殖	△	短距離飛翔	A	△	4	2	8	○	抵抗性がある薬剤 多数(42種:ワタア ブラムシ)	×	-	花きの振興に 関する法律	A	○	キクヒメヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ、キクギケアブラムシ等が発生する。キクヒメヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシは茎、新芽、葉に、キクギケアブラムシは葉裏に寄生することが多い。葉への吸汁被害だけでなく、甘露ですす病が発生する。ウイルス病も媒介する。花や葉への加害により著しく商品価値が低下するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
200	花き	きく	5,262	654	1	ハスモンヨトウ	×	6	△	発53.25ha 防1292.25ha	1.0% 24.6%	B	○	高温で急速に 増殖	○	長距離飛翔	A	○	4	3	12	○	薬剤抵抗性フェーズⅢ(シベルメト リ、PAP、メソル ル、BT、エトフエ ンブロックス等) ・抵抗性がある薬剤 多数(37種)	×	-	花きの振興に 関する法律	A	○	極めて広食性。ふ化した幼虫が集団で葉裏から表皮を残して食害する。発生密度が高くなると、幼虫は分散して食害を続ける。中齢幼虫以降は、葉・蕾・花も食害する。春から降雨が少なく、高温が続いた年の秋に多発する傾向がある。耐寒性が低く、冬季休眠性がないため、国内では一部の温暖な地域を除き、露地での越冬は困難。ハウス内や温暖な地域で越冬した個体群が長距離移動し、多くの農作物を加害するため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。
201	花き	きく	5,262	654	2	白さび病	△	27	×	発249.8ha 防6076.4ha	4.8% 11.5%	B	○	冷涼で降雨 が続くと多発	△	遊走子の雨 滴による伝 播	A	○	4	3	12	×	-	×	-	花きの振興に 関する法律	A	○	葉、がく、緑色の茎、花弁に発生する。葉では淡黄色の小斑点を生じ、病勢が激しいとねじれや葉縁の巻き上がりなど奇形となる。施設栽培では2～5月に発生が多く、冷涼で降雨が連続すると露地の夏キクでも被害が多発する。雨風や灌水の飛沫で飛散し、伝播範囲は300mにもなるため、国の発生予察の対象として、適切に防除を行う必要がある。